

# 志木市遺跡群 13

田子山遺跡第78地点

西原大塚遺跡第54地点

2003

埼玉県志木市教育委員会





田子山遺跡63号住居跡遺物出土状態



田子山遺跡64号住居跡遺物出土状態



## はじめに

志木市教育委員会  
教育長 細田 信良

志木市は、市域北東部を流れる荒川、そして市域の中央部を流れる新河岸川・柳瀬川の三大河川の恵みを受け、太古の昔から自然環境に恵まれていたと考えられます。そのことを物語るように市内には河川を見下ろす台地の縁辺部を中心に遺跡が存在しています。

現在、市内には14ヶ所の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が確認されており、旧石器時代から近世・近代に至るまでの集落跡や城館跡・墓跡など多岐に及んでいます。

ここに刊行する「志木市遺跡群13」は、国庫・県費補助事業として、志木市教育委員会が、平成13年度に実施した市内遺跡発掘調査事業の調査成果を収録したものです。

平成13年度は、確認調査・発掘調査等を併せ、33地点の調査を実施しましたが、本書は、この中で発掘調査を実施した田子山遺跡第78地点、西原大塚遺跡第54地点の調査成果を主にまとめています。

主な内容についてですが、田子山遺跡第78地点からは、縄文時代の集石1基、平安時代（9世紀代）の住居跡2軒が検出され、当時の生活を知る手がかりとなる貴重な土師器・須恵器といった土器や砥石などが発見されました。

また、西原大塚遺跡第54地点からは、縄文時代中期の土坑7基、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての方形周溝墓1基が検出され、特に縄文時代中期の土坑からは、多くの土器・石器が発見されました。

これらの貴重な遺構・遺物から、志木市の歴史や考古学研究の更なる深まりが期待されることは大変喜ばしいことであり、本書が郷土の歴史研究のために広く活用されますように切に願っています。

最後になりましたが、本書の刊行にあたり、ご指導ご協力をいただきました文化庁、埼玉県文化財保護課、そして深いご理解とご協力を賜りました地元の多くの方々並びに関係者に対し、心から厚くお礼申し上げます。

## 例 言

1. 本書は、埼玉県志木市に所在する遺跡群の平成13年度の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査・整理作業は、志木市教育委員会が主体となり、国庫及び県費の補助金の交付を受け実施した。発掘調査は、平成13年4月2日より平成14年3月29日までの期間を対象とした。
3. 本書の作成において、執筆は以下のように分担して行い、編集は執筆者が行った。

尾形則敏 第1章、第2・3章第1節・第2節の遺物、第4章

深井恵子 第2・3章第2節の遺構

4. 田子山遺跡第78地点・西原大塚遺跡第54地点の石器の実測及び観察表の作成は、(有)アルケリーサーチ代表取締役藤波啓容に依頼した。
5. 遺物の実測は、鎌本あけみ・星野恵美子・松浦恵子が行い、遺構・遺物のトレースは深井恵子が行った。写真撮影は尾形則敏が行った。
5. 本書の遺構・遺物の挿図版の指示は、以下のとおりである。

○挿図版の縮尺は、それぞれに明記した。

○遺構挿図版中の水系レベルは、海拔標高を示す。

○ビット・掘り込み内の数値は、床面もしくは確認面からの深さを示し、単位はcmである。また、同一遺構内にあるビットでも、おそらく後世のビットと思われるものには、数値を省略した。

○遺構挿図版中のドットは遺物出土位置を示し、その番号は遺物挿図版中の遺物番号と一致する。

○遺構の略記号は、以下のとおりである。

S = 縄文時代の集石    H = 平安時代の住居跡    D = 土坑    P = ビット

### 6. 調査組織

調査主体者	志木市教育委員会教育政策部生涯学習課
教 育 長	細田 信良
教 育 政 策 部 長	谷合 弘行
教育政策部参事兼生涯学習課長	土橋 春樹
生涯学習課主幹	金子 雅佳
生涯学習課主査	関根 正明
”	佐々木保俊
生涯学習課主任	新井由起子
”	尾形 則敏
”	倉部 恵子

志木市文化財保護委員（5名）

神山 健吉（委員長）・井上 國夫（副委員長）・高橋 長次・高橋 豊・内田 正子

### 7. 発掘調査及び整理作業参加者

○田子山遺跡第78地点

調査担当者 尾形 則敏

発掘調査員 深井 恵子

発掘協力員 足立 裕子・遠藤 英子・鎌本あけみ・高田美智子・二階堂美知子・成田しのぶ・  
富田 静江・高杉 朝子・土屋 富子・星野恵美子・松浦 恵子・山口 優子・  
佐々木 潤（東洋大学3年生）

○西原大塚遺跡第54地点

調査担当者 尾形 則敏

発掘調査員 深井 恵子

発掘協力員 遠藤 英子・奥野 恭子・鎌本あけみ・佐々木 潤・鈴木 浩子・高田美智子・  
星野恵美子・松浦 恵子・山口 優子  
藤岡 智子・福永亜希子（早稲田大学2年生）  
田村 知子（昭和女子大学2年生）

○整理協力員 遠藤 英子・奥野 恭子・鎌本あけみ・佐々木 潤・鈴木 浩子・高田美智子・  
藤岡 智子・星野恵美子・松浦 恵子・山口 優子

8. 各遺跡の発掘調査及び整理作業・報告書作成には、以下の諸機関・諸氏のご教示・ご援助を賜った。  
記して感謝する次第である（敬称略）。

埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課・埼玉県立博物館・埼玉県立歴史資料館・埼玉県立さきたま  
資料館・朝霞市教育委員会・新座市教育委員会・和光市教育委員会・朝霞市博物館・富士見市立水子  
貝塚資料館・志木市立志木第四小学校

浅野晴樹・荒井幹夫・石井 寛・飯田充晴・井上洋一・上田 寛・江原 順・加藤秀之・片平雅俊・  
隈本健介・栗原和彦・小出輝雄・肥沼正和・小滝 勉・小宮恒雄・小林寛子・齋藤欣延・坂上克弘・  
笹森健一・斯波 治・鈴木一郎・鈴木重信・岡田 眞・高橋 学・田代雄介・田中広明・照林敏郎・  
並木 隆・根本 靖・野沢 均・原 京子・早坂廣人・廣田吉三郎・福田 聖・藤波啓容・堀 善之・  
松本 完・松本高雄・水口由紀子・三田光明・村本周三・柳井彰宏・山田尚友・和田晋治

田子山遺跡第78地点（開発主体者 個人）

西原大塚遺跡第54地点（開発主体者 個人）

# 目 次

巻頭図版

はじめに

例 言

目 次

挿図目次

表 目 次

図版目次

第1章 平成13年度の調査成果	1
第1節 市城の地形と遺跡	1
第2節 調査に至る経過	6
第2章 田子山遺跡第78地点の調査	8
第1節 遺跡の概要	8
(1) 立地と環境	8
(2) 発掘調査の経過	8
第2節 検出された遺構と遺物	10
(1) 集石	10
(2) 住居跡	11
(3) 遺構外出土遺物	21
第3章 西原大塚遺跡第54地点の調査	23
第1節 遺跡の概要	23
(1) 立地と環境	23
(2) 発掘調査の経過	23
第2節 検出された遺構と遺物	25
(1) 縄文時代	25
(2) 弥生時代後期から古墳時代前期	33
(3) 遺構外出土遺物	33
第4章 まとめ	35

図 版

報告書抄録



## 挿図目次

第1図	市城の地形と調査地点 (1/20000)	2
第2図	周辺の地形と調査地点 (1/5000)	8
第3図	遺構分布図 (1/200)	9
第4図	5号集石・出土遺物 (1/30・1/3)	10
第5図	63号住居跡 (1/60)	12
第6図	63号住居跡遺物出土状態 (1/60・1/9)	12
第7図	63号住居跡カマド (1/30)	13
第8図	63号住居跡出土遺物 (1/4・1/3)	13
第9図	64A・B号住居跡 (1/60)	16
第10図	64号住居跡遺物出土状態 (1/60・1/9)	17
第11図	64A号住居跡カマド (1/30)	17
第12図	64C号住居跡 (1/60)	18
第13図	64号住居跡出土遺物1 (1/4)	20
第14図	64号住居跡出土遺物2 (1/3)	21
第15図	遺構外出土遺物 (1/3)	22
第16図	周辺の地形と調査地点 (1/5000)	24
第17図	遺構分布図 (1/100)	25
第18図	上坑1 (1/30)	28
第19図	上坑2 (1/30)	29
第20図	上坑出土遺物1 (1/3)	30
第21図	上坑出土遺物2 (1/3)	31
第22図	19号方形周溝墓 (1/60)	32
第23図	土坑・遺構外出土石器 (2/3)	34
第24図	環形土器の口径・底径比	35

## 表目次

第1表	志木市埋蔵文化財包蔵地一覧	1
第2表	平成13年度調査地点一覧	4
第3表	石器観察表	33

## 図版目次

- 図版 1 田子山遺跡第78地点  
1. 調査区近景 2. 確認調査風景 3・4. 5号集石  
5・6. 63号住居跡遺物出土状態 7. 63号住居跡 8. 63号住居跡カマド
- 図版 2 田子山遺跡第78地点  
1. 発掘風景 2～7. 64号住居跡遺物出土状態 8. 64号住居跡
- 図版 3 田子山遺跡第78地点  
1. 5号集石出土遺物 2・3. 63号住居跡出土遺物 4. 64号住居跡出土遺物
- 図版 4 田子山遺跡第78地点  
1. 64号住居跡出土遺物 2. 64号住居跡出土鉄製品(26) 3. 遺構外出土石製品  
4. 遺構外出土遺物
- 図版 5 西原大塚遺跡第54地点  
1. 調査区近景 2. 発掘風景 3. 405号土坑 4. 406号土坑 5. 407号土坑  
6・7. 408号土坑遺物出土状態 8. 408号土坑
- 図版 6 西原大塚遺跡第54地点  
1. 409号土坑 2. 410・411号土坑 3・4. 19号方形周溝墓土層断面  
5. 19号方形周溝墓西溝 6. 19号方形周溝墓南溝 7. 発掘風景 8. 調査区全景
- 図版 7 西原大塚遺跡第54地点  
1. 405号土坑出土遺物 2. 406号土坑出土遺物 3. 407号土坑出土遺物  
4. 408号土坑出土遺物
- 図版 8 西原大塚遺跡第54地点  
1. 409号土坑出土遺物 2. 410号土坑出土遺物 3. 411号土坑出土遺物  
4. 遺構外出土遺物

# 第1章 平成13年度の調査成果

## 第1節 市域の地形と遺跡

志木市は、埼玉県の南西部に位置し、市域はおおよそ南北4.71km、東西4.73kmの広がりを持ち、面積は9.06km<sup>2</sup>、人口約6万6千の自然と文化の調和する都市である。

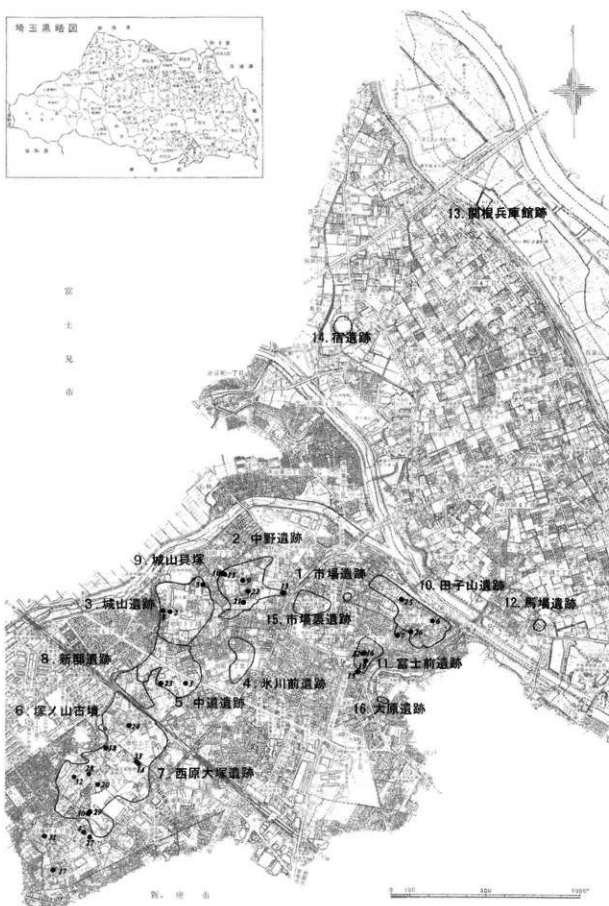
地理的景観を眺めて見ると、市域東部の宗岡地区は、荒川（旧入間川）の形成した沖積低地が広がり、市域西部の本町・柏町・幸町地区は、古多摩川によって形成された武蔵野台地の上にある。また、市内には東部に荒川、中央に古くは舟運で利用された新河岸川、そして西部から中央に新河岸川と合流する柳瀬川の3本の川が流れている。

こうした自然環境の中で、西原大塚遺跡をはじめ市域の大部分の遺跡は、柳瀬川・新河岸川右岸流域の台地縁辺部に帯状に存在している。遺跡は柳瀬川上流から、西原大塚遺跡（7）、中道遺跡（5）、新邸遺跡（8）、城山遺跡（3）、中野遺跡（2）、水川前遺跡（4）、市場裏遺跡（15）、市場遺跡（1）、田子山遺跡（10）、富士前遺跡（11）、大原遺跡（16）の順に名付けられている。また、荒川・新河岸川が形成した沖積低地でも、馬場遺跡（12）、宿遺跡（14）、関根兵庫館跡（13）のように自然堤防上に存

No.	遺跡名	遺跡の規模	地目	遺跡の種類	遺跡の時代	主な遺構	主な遺物
1	市場	700m <sup>2</sup>	宅地	遺物散布地	不明	地下式坑?	なし
2	中野	62,000m <sup>2</sup>	畑・宅地	集落跡	旧石器、縄(早～晩)、弥(後)、古(前～後)、平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、井戸跡、溝跡等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器等
3	城山	82,000m <sup>2</sup>	畑・宅地	城跡・集落跡	縄(早～中)、弥(後)、古(前～後)、弥・平、中・近世	住居跡、土坑、井戸跡、溝跡、給水設備遺、跡遺構等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器等
4	水川前	21,200m <sup>2</sup>	畑・宅地	遺物散布地	古墳・平安?	なし	なし
5	中道	66,500m <sup>2</sup>	畑・宅地	集落跡	旧石器、縄(中)、弥(後)、古(後)、弥・平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、井戸跡、溝跡等	石器、縄文土器、古銭、人骨、土師器、須恵器、陶磁器等
6	塚ノ山古墳	800m <sup>2</sup>	林	古墳?	古墳?	なし	なし
7	西原大塚	231,400m <sup>2</sup>	畑・宅地	集落跡	旧石器、縄(前～晩)、弥(後)、古(前～後)、弥・平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、井戸跡、溝跡等	石器、縄文・弥生土器、古銭土師器、須恵器、陶磁器等
8	新邸	22,500m <sup>2</sup>	畑・宅地	貝塚・集落跡	縄(前)、古(前)、中・近世	住居跡、土坑、井戸跡、溝跡、段切状遺構、ピット跡等	石器、縄文・弥生土器、古銭土師器、陶磁器等
9	城山貝塚	900m <sup>2</sup>	林	貝塚	縄(前)	斜面貝塚	縄文土器、石器、貝
10	田子山	66,700m <sup>2</sup>	畑・宅地	集落跡	縄(早～晩)弥(後)、古(後)、弥・平、中・近世、近代	住居跡、土坑、ローム層遺構、溝跡、方形・円形溝遺構等	縄文・弥生土器、炭化種子、土師器、須恵器、陶磁器等
11	富士前	18,200m <sup>2</sup>	宅地	集落跡	弥(後)～古(前)	住居跡	弥生土器、土師器
12	馬場	2,800m <sup>2</sup>	畑	集落跡	古(前)	住居跡?	土師器
13	関根兵庫館跡	4,900m <sup>2</sup>	グラウンド	館跡	中世	不明	なし
14	宿	7,700m <sup>2</sup>	田	館跡	中世	井桁状構築物	木・石製品
15	市場裏	19,200m <sup>2</sup>	宅地	墓跡	弥(後)～古(前)、近代	方形周溝墓	弥生土器、土師器、土師瓦
16	大原	1,700m <sup>2</sup>	宅地	不明	近世以降?	溝跡	なし

平成14年11月29日現在

第1表 志木市埋蔵文化財包蔵地一覧



第1図 市域の地形と調査地点 (1/20000)

平成14年11月29日現在

在する遺跡も明らかにされつつあり、将来的には新たな遺跡が相次いで発見される可能性がある。なお、市内の遺跡総数は、平成14年11月29日現在、前述した14遺跡に塚ノ山古墳（6）、城山貝塚（9）を加えた16遺跡である（第1図）。

次に市内の遺跡を時代順に概観してみることにする。

志木市内に最初に人が住みついたのは、旧石器時代からで、この時代の遺跡としては、柳瀬川右岸の西原大塚・中道・中野遺跡がある。中道遺跡では、立川ローム層のIV層上部・VI層・VII層で文化層が確認されており、礫群、石器集中地点が検出されている。これにより、黒曜石製のスクレイパー・ナイフ形石器や安山岩や凝灰岩の石核や剥片などが発見されている。

最近では、平成11～12年度に調査が実施された東京電力志木変電所の増設工事に伴う中野遺跡第49地点でも立川ローム層のIV層下部から、黒曜石・頁岩の石材の石核・剥片が約60点発見されている。

縄文時代になると、草創期では、城山遺跡から爪形文系土器1点、田子山遺跡から有茎尖頭器1点が出土している。早期では、田子山遺跡から撚糸文・沈線文・条痕文系土器、富士前・城山遺跡から撚糸文系土器が数点出土している。住居跡としては、西原大塚・新邸遺跡の前期黒浜式期のものが最古に位置付けられ、それぞれ1軒検出されている。そのうち、新邸遺跡のものは貝層をもつ住居跡である。また、平成2年度に市指定文化財に認定された城山貝塚も縄文海進期にあたるこの頃の時代に形成された斜面貝塚と考えられる。

遺跡が最も増加するのは、中期後葉の勝坂式～加曾利E式期である。西原大塚遺跡では、多くの住居跡が環状に配置する可能性のあることが指摘されている。その他、中道・城山・中野・田子山遺跡からも住居跡・土坑などが発見されている。中期末葉からは遺跡が減少し、現在のところ西原大塚遺跡から敷石をもつ住居跡が1軒確認されるのみである。

さらに後期では住居跡も皆無で、唯一遺構から発見される例は、田子山遺跡184号土坑である。この土坑からは、下層から称名寺I式期の土器、上層からII式の特徴をもつ土器が出土している。晩期になると、中野・田子山遺跡から安行ⅢC式・千網式の土器片が少量発見されるにとどまり、以降市内では遺跡が希薄になる傾向にあるが、平成12年度の西原地区特定区画整理事業に伴う発掘調査により、後期の堀之内式期の住居跡1軒と遺物集中地点、晩期と思われる溝跡1本が検出されている。

弥生時代では、現在のところ、前・中期に遡る遺跡は存在しない。大部分が後期末葉から古墳時代前期にかけての遺跡であろうと考えられる。その中で、田子山遺跡第21号住居跡は後期中葉に比定される可能性があり、その住居跡からは、多数の土器をはじめ、大量の炭化種子（イネ・アワ・ダイズなど）、炭化材が出土し、当時の食糧事情を考える上で重要である。富士前遺跡では、志木市史にも掲載されているが、不時の発見に伴い、籠目痕をもつ壺形土器をはじめとした多くの土器が発見されている。

西原大塚遺跡では後期末葉から古墳時代前期にかけての住居跡が200軒近く確認されており、市内最大の集落跡であることが判明している。特に、122号住居跡からは、全国的にも稀な「イヌ」を象ったと思われる動物形土製品が出土している。

当時の墓域の可能性として、方形周溝墓が、昭和62（1987）年以降、西原大塚・市場裏・田子山遺跡の3遺跡から相次いで確認されており、集落跡との関連の中で今後注目されるであろう。古墳時代前期では、特に西原大塚遺跡10号方形周溝墓の溝底から一括出土した中に、畿内系の庄内式の長脚高環が出土していることに注目される。

さらに、最近では、平成11年度に西原大塚遺跡で発見された一辺20mを超える市内最大規模の17号方

第2表 平成13年度調査地点一覧

番号	調査地点	所在地	面積(m <sup>2</sup> )	確認調査日	調査期間	備 考
1	西原大塚遺跡 (区画整理事業)	幸町3丁目 3215他67筆	7,149.39	なし。		発掘調査は志木市遺跡調査会が実施。
2	城山遺跡 第42地点	柏町3丁目 2627-1他3筆	2,173.79	平成12年 12月18日	2月23日～ 6月29日	発掘調査は志木市遺跡調査会が実施。
3	中道遺跡 第56地点	柏町5丁目 2911-1他7筆	4,918.56	平成13年 2月20・21日	4月9日～ 4月11日	発掘調査は志木市遺跡調査会が実施。
4	西原大塚遺跡 第51地点	幸町4丁目 3401-2・4	67.43	5月24日		遺構・遺物は検出されなかった。
5	城山遺跡 第43地点	柏町3丁目 2599-9他1筆	117.00	5月29日		遺構・遺物は検出されなかった。
6	田子山遺跡 第77地点	本町2丁目 1687-1	125.48	6月11日		遺構・遺物は検出されなかった。
7	田子山遺跡 第78地点	本町3丁目 1826-1	173.10	6月8日	6月13日～ 7月10日	後述 第2章参照。
8	城山遺跡 第44地点	柏町3丁目 2627-12	132.30	なし。		現地踏査は6月20日に実施。 遺構・遺物は検出されなかった。
9	中野遺跡 第49地点	柏町1丁目 1503-1の一部	130.00	なし。	7月2日～ 7月23日	第3工程。平成11年度から継続。 発掘調査は志木市遺跡調査会が実施。
			50.00		1月23日～ 2月8日	第4工程。平成11年度から継続。 発掘調査は志木市遺跡調査会が実施。
10	中野遺跡 第55地点	柏町1丁目 1495-1	60.19	6月27日	6月28・29日	発掘調査は志木市遺跡調査会が実施。
11	中野遺跡 第56地点	柏町1丁目 1495-4他3筆	605.25	6月28日		盛土保存適用。
12	富士前遺跡 第18地点	本町3丁目 1856-1の一部	256.53	7月17日		遺構・遺物は検出されなかった。
13	中野遺跡 第57地点	柏町1丁目 1526-1の一部	494.07	8月3日	8月20日～ 9月8日	発掘調査は志木市遺跡調査会が実施。
14	西原大塚遺跡 第52地点	幸町3丁目 3236-2・3	82.81	8月10日		遺構・遺物は検出されなかった。
15	富士前遺跡 第19地点	本町3丁目 1877-1の一部	213.93	なし。		工事立会いは9月5日に実施。 遺構・遺物は検出されなかった。
16	富士前遺跡 第20地点	本町3丁目 1857-3・16	144.63	9月12日		遺構・遺物は検出されなかった。
17	西原大塚遺跡 第53地点	幸町4丁目 3517-1他2筆	746.10	9月13日		遺構・遺物は検出されなかった。
18	西原大塚遺跡 第54地点	幸町3丁目 3154の一部	90.74	9月12日	9月13・14日	後述 第3章参照。
19	富士前遺跡 第21地点	本町3丁目 1866-1の一部	199.08	9月25日		遺構・遺物は検出されなかった。
20	西原大塚遺跡 第55地点	幸町3丁目 3147の一部他1筆	275.50	10月2日		盛土保存適用。

番号	調査地点	所在地	面積 (㎡)	確認調査日	調査期間	備考
21	中野遺跡 第58地点	柏町1丁目 1515-2の一部	141.25	10月11日		盛土保存適用。
22	中野遺跡 第59地点	柏町1丁目 1505-21・23	101.35	11月2日		盛土保存適用。
23	中道遺跡 第57地点	柏町5丁目 2944-6	124.24	11月22日		遺構・遺物は検出されなかった。
24	西原大塚遺跡 第56地点	幸町2丁目 3041-2・3の一部	57.13	11月28日		盛土保存適用。
25	田子山遺跡 第79地点	本町2丁目 1698-24	76.67	12月19日		盛土保存適用。
26	田子山遺跡 第80地点	本町2丁目 1733-3	120.53	平成14年 1月22日		盛土保存適用。
27	西原大塚遺跡 第57地点	幸町4丁目 3403-1の一部	100.00	1月30日		遺構・遺物は検出されなかった。
28	西原大塚遺跡 第58地点	幸町3丁目 3129-3	427.63	2月20日		盛土保存適用。
29	西原大塚遺跡 第59地点	幸町3丁目 3138-1の一部	199.96	2月22日		遺構・遺物は検出されなかった。
30	西原大塚遺跡 第60地点	幸町3丁目 3138-1の一部	137.98	2月22日		遺構・遺物は検出されなかった。
31	西原大塚遺跡 第61地点	幸町4丁目 3504-6	106.60	2月27日		遺構・遺物は検出されなかった。
32	西原大塚遺跡 第62地点	幸町3丁目 3110-10-部地1筆	487.00	3月1日	3月14日～ 3月29日	発掘調査は志木市遺跡調査会が実施。
33	西原大塚遺跡 第63地点	幸町3丁目 3236-2の一部	107.72	3月12日		遺構・遺物は検出されなかった。
合 計			2,0393.94			

形周溝墓が特筆すべきであろう。この方形周溝墓の溝からは、珍しい鳥形土器をはじめ、畿内系の有段口縁壺、吉ヶ谷式系の壺、在地系の壺などと大きく畿内・比企地域・在地の3要素の特徴を示す壺が出上しており、こうした地域に関わる被葬者の人物像が浮き彫りにされたことで、当地域の弥生時代後期から古墳時代前期の歴史を紐解く手がかりになったことは重要である。

古墳時代でも前期末葉から中期になると、遺跡が減少する。中期の遺跡では、中道・城山・中野遺跡から住居跡が発見されている。特に中道遺跡第19号住居跡は、5世紀中葉に比定され、市内最古のカマドをもつ住居跡として注目される。

5世紀末葉になると、遺跡が増加傾向にあり、特に6世紀後半から7世紀後葉にかけては、縄文中期を越えるほどの爆発的な増加をみる。こうした集落跡は現在、中道・城山・中野遺跡に比較的古い5世紀代の住居跡が確認されていることから、柏町地区を中心に存在した集落が、6世紀後半以降、周辺の地域に拡散するという動きを読み取ることができる。

現在、5世紀後半から7世紀後半にかけての時期に比定できる住居跡の軒数は、最も多い城山遺跡で130軒を越え、次いで中野遺跡で50軒、中道遺跡で15軒を数える。また、田子山遺跡では、6世紀後半

以降に比定できるものと考えられる4.1×4.7mのやや不整形で2ヶ所にブリッジをもつ小型の円形周溝墓が1基確認されている。

奈良・平安時代の遺跡は、古墳時代後期以降に拡散した集落内で確認される傾向にあり、田子山遺跡は、この時代を代表する遺跡として挙げることができる。この遺跡では、住居跡の他、掘立柱建築遺構、溝跡、100基を越える土坑群が確認されている。遺物としては、土器・灰釉陶器の他、腰帯の一部である銅製の丸柄、鉄製の紡錘車・刀子などが出土している。

また、平安時代の城山遺跡128号住居跡からは、印面に「冨」1文字が書かれた銅製の印章が出土したことに注目される。この住居跡からはその他、緑釉陶器の小破片1点、布目瓦の小破片2点などが出土している。

中・近世では、柏城跡、関根兵庫館跡が代表される遺跡である。特に、柏城跡内での数次にわたる発掘調査により、『節村旧記』にある「柏之城落城後の屋敷割の図」に相当する堀跡などが多数発見されている。最新では平成13年3月から6月に城山遺跡第42地点の調査が実施され、柏城関連の大堀、そして多数の土坑・地下室・井戸跡などが検出されている。特筆すべき遺物としては、鉄鍋の完形品が234号土坑の坑底面から伏せた状態で置かれて出土している。

また、頭部及び上半部を欠く馬の骨が、城山遺跡第29地点の127号土坑から検出されている。この土坑からは、板碑と土師質土器の他、炭化種子（イネ・オオムギ・コムギなど）が出土しており、特に、イネの塊状のものは「おにぎり」あるいは「ちまき」のようなものであるという分析結果が報告されている。さらに、鑄造関連の遺構も検出されている。130号土坑については鑄造遺構、134号土坑については溶解炉に該当し、遺物としては、大量の鉄滓（スラッグ）、鑄型、三叉状の土製品、砥石などが出土している。

近代以降の遺跡では、田子山遺跡の富士塚築造に関連するローマ採掘遺構が検出されており、地域研究の重要な資料であると言える。

## 第2節 調査に至る経過

志木市は、都心から25km圏内に位置し、東武東上線志木-池袋駅間を急行で20分という交通の便に恵まれ、都心近郊のベッドタウンとして発展してきた。近年の都市化に伴い、各種の開発行方も増大してきたが、とりわけ住宅建設の占める割合が高く開発による遺跡破壊が進行する状況にある。また、遺跡の集中する本町・柏町・幸町地区は都市化の最も進展する地域になっていることも遺跡破壊の事態を一層大きくしていると言える。

こうした状況の中、志木市教育委員会では文化財行政を進めていくために、埋蔵文化財を保護・保存していくことが重要な課題となっている。しかしながら、開発により遺跡の現状保存が困難な状況であり、記録保存という処置によって対処しているのが現状である。

ここで、志木市における発掘調査の経過を振り返ってみると、まず、1973（昭和48）年に西原人塚遺跡において発掘調査が実施されたのが最初の調査であろう。そして以後、1982（昭和57）年までは、志木市史編さん事業に伴う学術的な発掘調査が実施されていた。1983（昭和58）年には、志木市において遺跡調査会が組織され、1985（昭和60）年には当市にとって最大規模の調査となった城山遺跡第1地点の調査が実施された。この調査は、市内における発掘調査体制の本格的組織化の契機となり、以降志木



市の埋蔵文化財保護を推進する上で大きな転換となったと言える。

そうした中、当市における開発行為、特に住宅建設については小規模のものが多くことから、こうした小規模の開発にも対応する必要があった。しかし、小規模な開発の当事者は個人で、その個人が専用に使用する住宅の建設についての記録保存の実施については、費用の負担など記録保存を進める上で困難な点が多かった。そのため、1987（昭和62）年以降、国・県よりの補助金の交付を受け、志木市教育委員会を主体とした発掘調査を実施することになったのである。さらに、民間・公共事業を問わず確認調査については、すべて公費で対応し、開発事業者の負担軽減と埋蔵文化財包蔵地の詳細な分布状況の把握を積極的に進めている。特に、発掘調査件数及び面積が、1987（昭和62）年以降急激に増加しているのは、こうした理由によるものと考えられる。

最近では、昭和40年前後の人口増加が始まった頃に建設された個人住宅の建て替えも多くなってきており、平成2年度以来、個人住宅建設に伴う調査件数が増加してきている。また、平成8年度は全体の調査件数及び面積が激減しているが、教育委員会で行った発掘調査の件数については逆に過去最高の8件を越え9件にのぼり増加したという現象が生じた。これについては、平成7年度に調査対象区域の見直しを行ったことが影響したものと考えられる。その見直しの内容は、今まで「遺跡の存在する可能性が高い地域」でも発見が全く無かった地域を過去の調査成果により割り出し、その地域については「将来遺跡が発見される可能性がある地域」に変更したというものである。なお、平成9年度より、遺跡の現状保存を目的とするため、遺跡の盛土保存を適用とした制度を導入するに至っている。

平成13年度は33件の確認・発掘調査等を実施した。そのうち、志木市教育委員会が実施した発掘調査は2件で、志木市遺跡調査会が実施した発掘調査は7件であった。なお、盛土保存の適用を受けたのは8件であった。

工事内容の内訳件数は、個人専用住宅19件、共同住宅3件、分譲住宅2件、宅地造成2件、店舗建設1件、寺院建設1件、倉庫建設1件、物置建設1件、区画整理事業1件、変電所増設工事1件、道路造成工事1件である。

注1 遺跡の存否及び範囲については、平成15年1月10日付の変更増補によって、大々的に見直され修正されている。その主な内容は、市場・水川前遺跡の2遺跡の削除と中野・城山・中道・西原大塚・新郷・田子山・富士前・市場裏遺跡の8遺跡の一部範囲縮小である。その結果、本市の遺跡総数は、14遺跡に変更されることになった。

## 第2章 田子山遺跡第78地点の調査

### 第1節 遺跡の概要

#### (1) 立地と環境

田子山遺跡は、志木市本町2丁目を中心に広がる遺跡で、東武東上線志木駅の北東約1.3kmに位置している。遺跡は、武蔵野台地の北端部にあたり、標高は約15m、低地との比高差は約10mである。

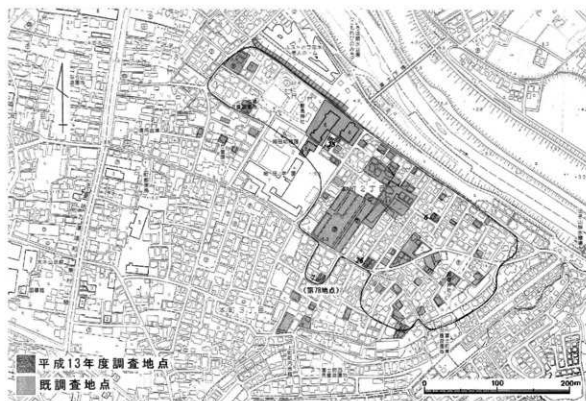
遺跡の周辺を眺めると、北側は際立った断崖地形になっており、北東方向には新河岸川を臨むことができる。また、東側には大きな谷が入り込んでおり、本遺跡の東端は、この開析谷に面して分布する富士前・大原遺跡の延長上にあるものと考えられる。

遺跡の現況は、僅かに残っていた畑地においても平成5年以降、急速に進められたマンション・分譲住宅建設といった中規模開発によって、より一層宅地化が進行し、畑地・空地がほとんど見られない状況にある。

本遺跡は、昭和63年に第1回目の発掘調査が実施され、以後の調査から、縄文時代草創・早・中・後・晩期、弥生時代後期、古墳時代後期、奈良・平安時代、中世、近代の複合遺跡であることが判明している。

#### (2) 発掘調査の経過

確認調査は、平成13年6月8日に実施した。調査区域の短軸方向に2本のトレンチを設定し、バック



第2図 周辺の地形と調査地点 (1/5000)

平成14年11月29日現在

ホーを使用し表土を剥ぎ、同時に遺構確認作業を行った。その結果、カマドをもつ住居跡と考えられる遺構1基と別の住居跡と考えられる遺構1基を確認した。

そのため、ただちに依頼者に調査の結果を報告し、保存のための協議を行った。しかし、保存をするためには工事内容の計画を変更する必要性が生じたため、その日は一旦、埋め戻すことにし、教育委員会はその回答を待つことにした。その後、依頼者から、計画を変更することは不可能であるという回答を得た。同時に、依頼者から教育委員会に発掘調査の依頼があったため、教育委員会ではこれを受理し、発掘調査を実施することに決定した。

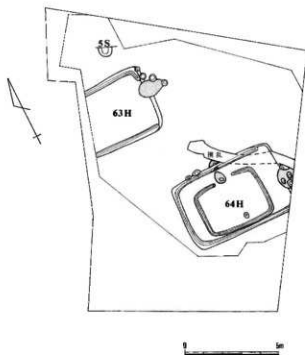
6月13日、重機による表土剥ぎを開始するが、調査区域内のほぼ全面に遺構が分布することから、残土置場を確保できないという理由により、同日には排土をダンプに積載し、調査区域外に搬出することにした。翌14日は雨天のため、調査は中止。翌週18日にその作業を再開し、午前中に終了した。当面の残土置場については、遺構の分布しない調査区東端に当てる予定とした。

人員導入による発掘調査は、18日から開始した。まず、器材の搬入作業を行い、その後、調査区域内の整備と細部の遺構確認作業を行った。その結果、調査区域内には、平安時代の住居跡2軒（63・64H）が分布していることが明らかになった。同日午前中には63Hの精査を開始する。63Hは東カマドの住居跡で、出土土器から9世紀後半に比定されるものと考えられた。4時頃からは64Hの精査を開始する。64Hは東カマドの住居跡で、出土土器から9世紀中葉に比定されるものと考えられた。

19日、63Hは床硬化面が確認された。64Hは覆土中から刀子が出土した。

20日～27日の期間は、併行して進められている城山遺跡第42地点の発掘調査の都合により、一時調査を中断する。

28日、午後から調査を再開する。63HはセクションAの実測を終了する。64Hは一部床面及び壁を確認する。また、カマドが東壁と北壁の2ヵ所で確認され、その遺存状態から判断し、北壁から東壁にカ



第3図 遺構分布図 (1/200)

マドの付け替えが行われものと推測される。

29日、63Hのセクションベルトをはずし、遺物出土状態の写真撮影を行う。その後、遺物出土状態の平板測量を行い、遺物を取り上げる。64Hは精査の続き。覆土中から遺物が多く出土している。また、床面近くから炭化材が多く出土していることから、本住居跡は焼失住居と考えられた。

7月2日、63Hは遺構の平板測量を終了する。64HはセクションAの実測を行い、その後セクションベルトをはずし、遺物出土状態の写真撮影を行う。その後、遺物出土状態の平板測量を行い、遺物を取り上げる。

3日、63Hは遺構の写真撮影を終了後、カマドの精査を開始する。64Hは昨日の続きで、遺物出土状態の平板測量を行い、遺物を取り上げる。また、63Hの写真撮影の際の周辺の清掃で、新たに集石(5S)1基が確認されたため、ただちに精査を開始した。

4日、63Hはカマド精査。64Hは遺構の写真撮影後、平板測量を開始する。同時にエレベーションB・Cを終了する。その後、北壁に設置されるカマドをBとし半載する。5Sはすべての実測を終了し、掘り方の写真撮影を行う。

5日、63Hはカマドの実測を終了後、掘り方の精査を開始、エレベーションに加え、すべて終了。64Hは東壁に設置されるカマドをAとし、精査を開始する。大部分攪乱により破壊されているため、半載し断面図と粘上範囲を平面図に加えるに留め、実測を終了する。また、床面を精査中に新たにカマドの痕跡と思われる粘上範囲と壁溝が確認されたため、急いでその部分の精査を開始する。本住居跡は拡張後カマドの付け替えが行われた住居であることが判明した。拡張前の住居跡をC、北壁にカマドをもつ住居跡をB、東壁にカマドをもつ最終段階の住居跡をAとすることにした。その後、住居跡Cの実測を終了し、すべての調査を完了した。

9日、器材の搬出作業を行い、翌10日、埋め戻しを完了した。

## 第2節 検出された遺構と遺物

### (1) 集石

#### 5号集石(第4図)

[構造] 北側は攪乱により壊されているため不明である。不明×66cm・深さ15cmの楕円形の土坑を伴う。(疎の状態)30個程の疎と土器片が2点出土した。被熱によると思われる破砕疎も確認された。(覆土)炭化物粒子を含む暗茶褐色土を基調とする。



第4図 5号集石・出土遺物(1/30・1/3)

[遺物] 覆土中から2点の土器小破片が出土し、接合した。

[時期] 縄文時代前期中葉。

#### 5号集石出土遺物(第4図)

黒浜式土器の小破片である。Lの無節縄文が施文される。色調は暗茶褐色を呈し、胎土中には繊維を多く含む。

## (2) 住居跡

### 63号住居跡(第5～7図)

[住居構造] 住居の西側は調査区域外にあると思われる。(平面形) 長方形。(規模) 不明×3.66m。(壁高) 31～43cmを測り、壁は急斜に立ち上がる。(壁溝) 確認できた範囲では、カマドをもつ東壁を除いて巡らされている。上幅22～30cm・下幅7～11cm・深さ6～11cmを測る。(床面) 壁際と南東コーナー付近以外は良く硬化している。中央部はほぼ直床で、北壁と南壁際に10cm弱・東壁際には15cm程の貼床が施されていた。(カマド) 東壁の中央より、北東コーナーに偏って位置する。攪乱及び後世のピットにより破壊を受けている。主軸方位はE-W。長さ不明・幅87cm・壁への掘り込み約90cmを測る。天井部と袖部は粘土で構築されていたと思われるが、安定した状態での粘土層は確認できなかった。煙道は30°程の勾配で立ち上がる。燃焼部はよく焼けており、支脚が出土している。(柱穴) 検出されなかった。(覆土) 11層に分層される。

[遺物] 須恵器坏・甕、土師器甕、砥石、鉄鎌などが出土した。

[時期] 平安時代(9世紀後葉)。

### 63号住居跡出土遺物(第8図1～11、図版3—3—12・13)

#### 須恵器坏形土器(1～4)

1は器高3.3cm・口径12.8cm・底径5.6cm。ロクロ回転は右回転で、底部には回転糸切り痕が残る。色調は暗灰褐色～暗黄褐色を呈し、胎土には砂粒・小石(最大4mm程)を含む。カマド右横の床面上からの出土で、遺存度は2/3程である。

2は器高3.7cm・推定口径12.4cm・底径5.3cm。ロクロ回転は右回転で、底部には回転糸切り痕が残る。色調は暗灰褐色を呈し、胎土には砂粒・小石(最大3mm程)を含む。住居跡南東隅のほぼ床面上からの出土で、遺存度は1/3強である。

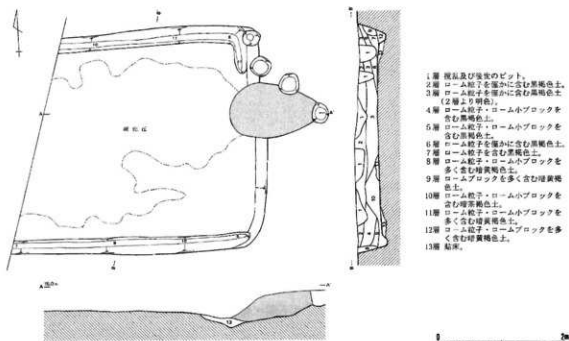
3は現器高3.6cm・推定口径12.0cm。ロクロ回転は右回転である。色調は暗灰褐色を呈し、胎土には砂粒・小石(最大3mm程)を含む。カマド内及びそのすぐ北縁からの出土で、遺存度は1/4程である。

4は現器高5.5cm・推定口径15.0cm。ロクロ回転は右回転である。色調は暗灰褐色を呈し、胎土には砂粒・小石(最大2mm程)を多く含む。カマド右横のほぼ床面上からの出土で、遺存度は1/5程である。

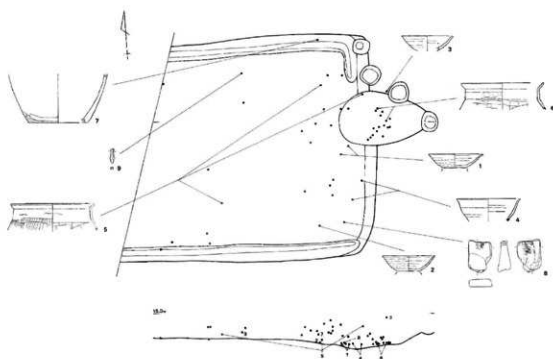
#### 土師器壺形土器(5・6)

5は現器高6.7cm・推定口径19.6cm。頸部から口縁部にかけては「コ」の字状を呈する。色調は暗茶褐色を呈し、胎土には茶褐色粒子・砂粒を含む。口縁部は内外面横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面は横方向にヘラ削りが施される。住居跡内覆土中からの散在的な出土で、口縁部から胴部上半にかけて、1/4程遺存する。

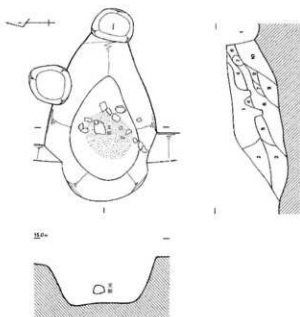
6は現器高6.4cm・推定口径19.8cm。頸部から口縁部にかけては「コ」の字状を呈する。色調は淡茶褐色を呈し、胎土には茶褐色粒子・砂粒を含む。口縁部は内外面横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面は



第5図 63号住居跡 (1/60)

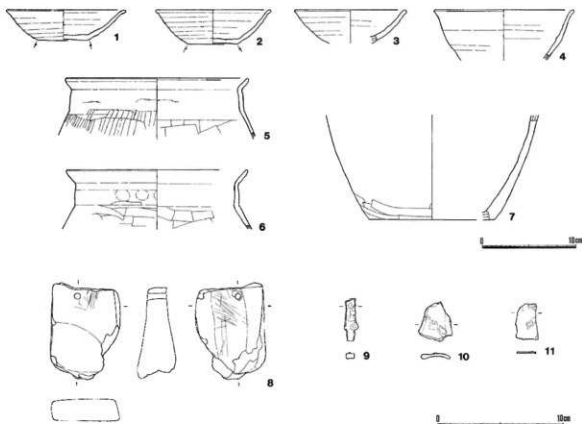


第6図 63号住居跡遺物出土状態 (1/60・1/9)



- 1層 腐土。
- 2層 ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子を含む暗赤褐色土。
- 3層 焼土粒子・焼土小ブロックを含み、ローム粒子・粘土粒子を僅かに含む暗褐色土。
- 4層 焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む暗褐色土。
- 5層 ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子を含む暗褐色土。
- 6層 焼土粒子・焼土小ブロックを多く、ローム粒子・粘土粒子を含む暗赤褐色土。
- 7層 赤褐色粘土(酸化粘土)。
- 8層 ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子を含む暗赤褐色土。
- 9層 ローム粒子・焼土粒子・焼土小ブロック・粘土粒子を含む暗赤褐色土。
- 10層 ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子を含む暗赤褐色土。

第7図 63号住居跡カマド (1/30)



第8図 63号住居跡出土遺物 (1/4・1/3)

横方向にヘラ削りが施される。カマド内からの出土で、口縁部から胴部上半にかけて、1/4程遺存する。

#### 須恵器壘形土器（7）

現器高11.4cm・推定底径13.4cm。底部から胴部にかけてはゆるやかなに外傾する。色調は濃灰褐色を呈し、胎土には砂粒・小石（最大3mm程）を含む。基本的な調整は内外面ナデられるが、外面底部はその後、ヘラ削りが施される。また、外面にはうっすらと叩き目痕が観察できる。住居跡北東隅の北壁上層からの出土で、胴部下半以下を1/5程遺存する。

#### 石製品（8）

砥石である。長さ7.4cm・幅5.5cm・最大厚3.0cm・重さ150g。使用面は上下面を除く4面であり、表面には細線が残る。また、上方には穿孔が開けられている。穿孔径は4.5mm。断面は撥状。住居跡南東隅の床面上5cm浮いた覆土中からの出土である。

#### 鉄製品（9～11）

9は鉄銚の頸部破片である。長さ3.5cm・最大幅1.1cm・厚さ4mm・重さ3.8g。断面は長方形を呈し、篋被部は棘齒被タイプである。北壁寄りの床面上14cm浮いた覆土中からの出土である。

10・11は用途不明品である。10は長さ3.2cm・最大幅2.7cm・厚さ2mm・重さ6.0g。11は長さ2.9cm・最大幅1.8cm・厚さ1mm・重さ1.4g。両者ともに覆土中からの出土である。

#### 灰釉陶器（12・13）

いずれも環形土器の口縁部小破片で、同一個体であろう。胎土の色調は灰白色を呈し、胎土には黒色粒子を僅かに含む。釉薬は淡緑色を基調とする。覆土中からの出土である。

#### 64号住居跡（第9～12図）

南東コーナーは調査区域外にあると思われる。本住居跡は、カマドが2ヶ所（カマドA・B）で確認され、貼床除去後にカマドと壁溝をもつ小竪穴（C号住居跡）が検出されたことから、拡張後に一度住居の建て替えが行われたものと考えられる。以下、A・B・C号住居跡として説明することにする。

#### 64A・B号住居跡（第9～11図）

〔住居構造〕A・Bとした住居跡は、基本的に2軒ではなく新旧2基のカマドの存在から、住居の建て替えが行われたものと考えられる。柱穴は検出されなかったが、硬化面は全体的に1～2cm程の段差をもち2枚の床面を確認できた。（平面形）長方形。（規模）5.90×3.95m。（壁高）29～45cmを測り、壁は急斜に立ち上がる。（壁溝）カマドAをもつ東壁では確認できなかった。上幅18～30cm・下幅5～13cm・深さ5～15cmを測る。（床面）壁際を除いてよく硬化している。1～2cm下にもよく硬化した床面が確認できた。中央はほぼ直床で、壁際には貼床が施されていた。（カマドA）東壁のほぼ中央に位置する。東側は調査区域外にあり、さらに後世のビットで壊されていたため遺存状態は悪く、袖部は確認できなかった。長さや壁への掘り込みは不明で、幅は約70cmを測る。（カマドB）北壁のほぼ中央に位置する。壁への掘り込み30cmを測る。旧カマドと考えられる。（柱穴）入口ビットと思われる小ビット1本が検出されたのみである。（覆土）8層に分層される。

#### 64C号住居跡（第12図）

〔住居構造〕A・Bの貼床除去後、カマドと壁溝が確認された。建て替え前の住居跡と考えられる（平面形）長方形。（規模）3.67×2.86m。（壁溝）カマドを除いて全周する。上幅13～16cm・下幅4～8cm・



深さ3～10cmを測る。(カマド)北壁のほぼ中央に位置する。残存していた部分は長さ64cm・幅56cm・壁への掘り込み16cmを測る。

[遺物 遺物の取り上げは、すべてA・B号住居跡を基準とする。C号住居跡の遺物については、土器小破片が少量出土したのみであるため、これらも第10図に一括して掲載した。遺物としては、須恵器環・甕、土師器甕、ミニチュア、砥石、刀子などが出土した。

[時期] 平安時代(9世紀前半から中葉)。

[所見] 特にA号住居跡は、覆土中から炭化材が多く出土しているため、焼失住居と考えられる。また、覆土中から第13図18～22の土器のような古墳時代後期の土器が出土した。混入品であろうか。

#### 64号住居跡出土遺物(第13・14図)

##### 須恵器杯形土器(1～9・18)

1は器高3.8cm・口径12.3cm・底径7.5cm。ロクロ回転は右回転で、底部には回転糸切り痕が残る。色調は暗青灰褐色を呈し、胎土には砂粒・小石(最大4mm程)を含む。住居南東隅の床面上5cm浮いた覆土中からの出土で、完形品である。

2は器高3.4cm・口径12.5cm・底径6.6cm。ロクロ回転は右回転で、底部には回転糸切り痕が残る。色調は暗黄褐色を基調とするが、全体に煤けている。胎土には砂粒・小石(最大9×4mm)を含む。住居南東隅の床面上4cm浮いた覆土中からの出土で、完形品である。

3は器高3.9cm・口径12.8cm・底径6.2cm。ロクロ回転は右回転で、底部には回転糸切り痕が残る。色調は灰褐色を基調とするが、全体に煤けている。胎土には砂粒・小石(最大3mm程)を含む。住居北壁の床面上4～18cm浮いた覆土中からの出土で、完形品である。

4は器高3.7cm・口径12.3cm・底径7.0cm。ロクロ回転は右回転で、底部には回転糸切り痕が残る。色調は暗灰褐色を呈し、胎土には砂粒・小石(最大3mm程)を含む。カマド前面の床面上4・13cm浮いた覆土中からの出土で、遺存度は1/2程である。

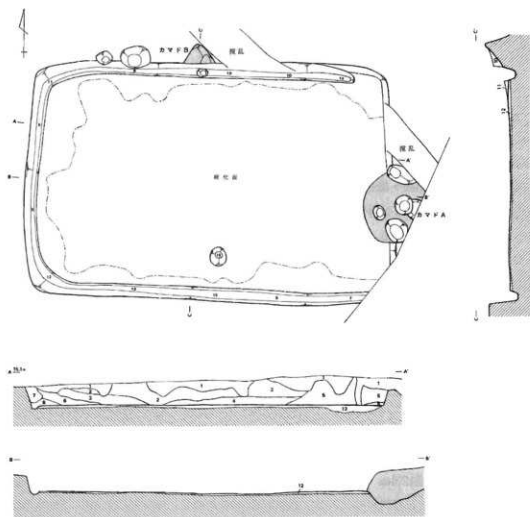
5は器高3.4cm・推定口径12.6cm・底径6.0cm。ロクロ回転は右回転で、底部には回転糸切り痕が残る。内外面の底部には細線による線刻が描かれる。色調は灰褐色を呈し、胎土には砂粒・小石・白色針状物質を含む。北壁寄りの床面上14cm浮いた覆土中からと貼床下からの出土で、遺存度は1/3程である。

6は器高3.4cm・推定口径12.8cm・底径6.3cm。ロクロ回転は右回転で、底部は回転糸切り後周辺ヘラ削りが施される。色調は灰褐色を呈し、胎土には砂粒・小石を多く、白色針状物質を僅かに含む。なお、内外面には火たすきが観察され、部分的には繊維の付着も見られる。北壁寄りの床面上21cm浮いた覆土中からの出土で、遺存度は1/3程である。

7は現器高2.7cm・推定口径13.0cm。ロクロ回転は右回転で、色調は暗青灰褐色を呈し、胎土には砂粒・小石を僅かに含む。住居南東隅の床面上10cm浮いた覆土中からの出土で、遺存度は1/6程である。

8は器高3.5cm・推定口径11.9cm・推定底径7.2cm。ロクロ回転は右回転である。外面には解読不明であるが、うっすらと墨書が施されている。色調は暗青灰褐色を呈し、胎土には砂粒・白色針状物質を含む。住居南西隅の床面上9cm浮いた覆土中からの出土で、遺存度は1/6程である。

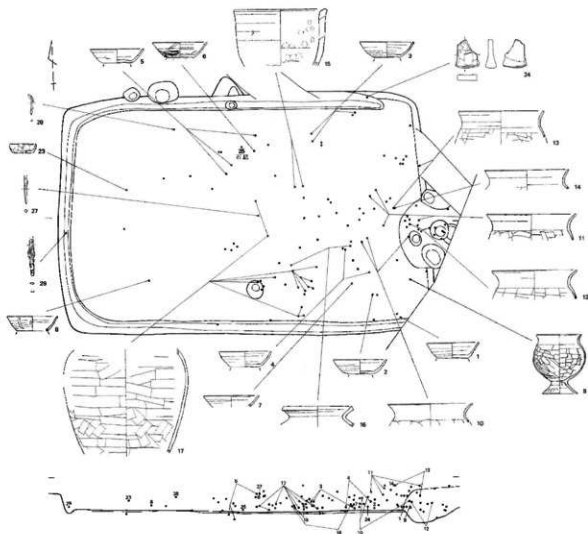
18は現器高3.4cm・推定口径9.6cm・推定受部径11.4cm。杯身である。ロクロ回転は右回転。口縁部は短く外反し、口唇部は丸い。底部には回転ヘラ削り調整が施される。色調は灰褐色を呈し、胎土には砂粒を僅かに含む。覆土中からの出土で、遺存度は1/5程である。



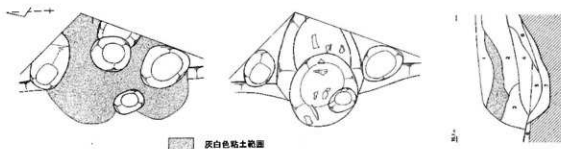
- 1層 礎瓦。
- 2層 ローム粒子・ローム小ブロック・粘土粒子・粘土小ブロックを含む黒褐色土。
- 3層 ローム粒子・ローム小ブロックを含む黒褐色土。
- 4層 ローム粒子・ローム小ブロック・粘土粒子・炭化物粒子・炭化材を含む黒褐色土。
- 5層 ローム粒子・ローム小ブロック・粘土粒子・炭化物粒子を含む黒色土。
- 6層 ローム粒子・ローム小ブロックを含む黒褐色土。
- 7層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗黒褐色土。
- 8層 ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子を含む黒褐色土。
- 9層 ローム粒子・ローム小ブロック・粘土粒子・炭化物粒子を含む暗黒褐色土。
- 10層 粘土粒子・粘土ブロックを多く、ローム粒子・ローム小ブロック、焼土粒子
- 11層 灰褐色粘土ブロック。
- 12層 陥床。

0 3m

第9図 64A・B号住居跡 (1/60)

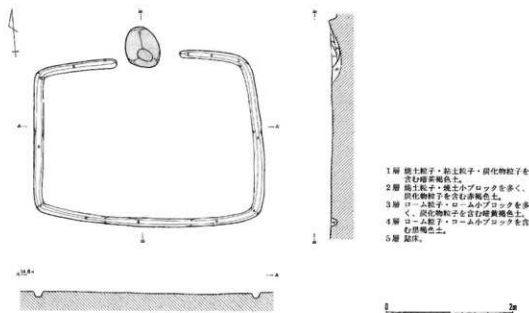


第10図 64号住居跡遺物出土状態 (1/60・1/9)



- 1層 粘土粒子・粘土小ブロック・粘土ブロックを多く、焼土粒子・焼土小ブロック・炭化物粒子を含む暗褐色土。
- 2層 粘土粒子・焼土小ブロック・粘土粒子・粘土小ブロックを多く、炭化物粒子を含む暗褐色土。
- 3層 ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子・炭化物粒子を含む暗褐色土。
- 4層 ローム粒子・焼土粒子・焼土小ブロック・粘土粒子・炭化物粒子を含む暗褐色土。
- 5層 ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子を含む暗褐色土。
- 6層 ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子を含む暗褐色土。
- 7層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗褐色土。
- 8層 陥床。

第11図 64A号住居跡カマド (1/30)



第12図 64C号住居跡 (1/60)

#### 土師器甕形土器 (9~15・19~22)

9は器高14.1cm・口径10.7cm・底径8.4cm。小型台付甕である。胴部は球状を呈し、口縁部は外反する。色調は暗茶褐色を基調とするが、全面が黒く煤けている。胎土には砂粒を多く含む。口縁部内外面及び脚台部内外面は横ナデ、胴部内面はヘラナデ、外面はヘラ削りが施される。カマド右横の床面上16cm浮いた覆土中からの出土で、遺存度は4/5強である。

10は現器高5.6cm・推定口径19.9cm。口縁部は外反する。色調は暗橙色を呈し、胎土には砂粒を多く、金雲母を僅かに含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削りが施される。カマド前面の床面上20cm前後浮いた覆土中からの出土で、口縁部から胴部上半にかけて1/2程遺存する。

11は現器高6.4cm・推定口径21.0cm。「コ」の字状の口縁部を呈する。色調は黒褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削りが施される。カマド前面の覆土中からの散在的な出土で、口縁部から胴部上半にかけて1/2程遺存する。

12は現器高7.0cm・推定口径20.0cm。頸部途中の輪積痕により、ゆるい「コ」の字状口縁を呈する。色調は暗橙色を呈し、胎土には砂粒を多く、茶褐色粒子を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削りが施される。カマド内からの出土で、口縁部から胴部上半にかけて1/5程遺存する。

13は現器高7.9cm・推定口径20.0cm。頸部途中に稜を有し、ゆるい「コ」の字状口縁を呈する。色調は暗橙褐色を呈し、胎土には砂粒を多く、黄褐色粒子を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削りが施される。カマド左横の床面上23・37cm浮いた覆土中からの出土で、口縁部から胴部上半にかけて1/5程遺存する。

14は現器高4.7cm・推定口径19.6cm。「コ」の字状の口縁部を呈する。色調は暗赤褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削りが施される。カマド前面の床面上18cm浮いた覆土中からの出土で、口縁部から胴部上半にかけて1/3程遺存する。

15は現器高13.5cm・推定口径22.0cm。口縁部に最大径をもち、器形は口縁部から底部にかけてゆるやかにすばまっている。口唇部は沈線状の窪みがまわる。色調は内面が暗灰褐色、外面が暗茶褐色を呈する。胎土には砂粒を多く、茶褐色粒子・小石を含む。内外面の全面に回転ナデが施される。ロクロ成形痕であろうか。また、内面には指頭押捺痕が観察される。住居中央付近の床面上5cm程浮いた覆土中からの出土で、口縁部から胴部上半にかけて1/4程遺存する。

19は現器高4.8cm・推定口径21.8cm。丸甕の口縁部破片であろう。色調は暗褐色を呈し、胎土には砂粒を多く、黄褐色粒子・小石を含む。内外面横ナデが施される。覆土中からの出土で、口縁部のみ1/3程遺存する。

20は現器高9.2cm・推定底径8.2cm。長甕の底部破片である。色調は明褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後ナデられている。覆土中からの出土で、底部のみ1/4程遺存する。

21は現器高5.6cm・底径8.0cm。長甕の底部破片である。色調は明褐色を基調とするが、全体的に暗灰褐色を呈する。胎土には砂粒を多く、茶褐色粒子・小石を僅かに含む。内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後ナデられている。覆土中からの出土で、底部のみ2/3程遺存する。

22は現器高2.5cm・底径9.5cm。丸甕の底部破片であろう。色調は暗褐色を基調とし、胎土には砂粒・白色粒子・小石を含む。内面はヘラナデ、外面はヘラ削りが施される。覆土中からの出土で、底部のみ1/2程遺存する。

#### 須恵器変形土器 (16・17)

16は現器高4.9cm・推定口径16.8cm。「く」の字口縁を呈し、口唇部は平坦に面取りが施されている。色調は暗灰褐色を呈し、胎土には砂粒を僅かに含む。外面には平行叩き目痕が残る。カマド前面の床面上5・7cm浮いた覆土中からの出土で、口縁部から胴部上半にかけて1/5程遺存する。

17は現器高27.9cm・胴部最大径29.4cm。胴部最大径は上半に測る。色調は内面が暗灰褐色、外面が暗青灰褐色を基調とする。胎土には砂粒・白色針状物質・小石を含む。内外面はていねいなナデによる仕上げが施されているが、部分的に叩き目痕がうっすらと観察できる。南壁付近の覆土中からの散在的な出土で、胴部上半から下半にかけて2/3程遺存する。

#### ミニチュア (23)

器高2.2cm・推定口径6.3cm・推定底径4.6cm。平底の底部をもち、底部から口縁部にかけては内湾する。色調は淡茶褐色を呈し、胎土には黄褐色粒子を多く、小石を含む。内外面に指頭押捺痕が観察される。西壁寄りの床面上16cm浮いた覆土中からの出土で、遺存度は1/3強である。

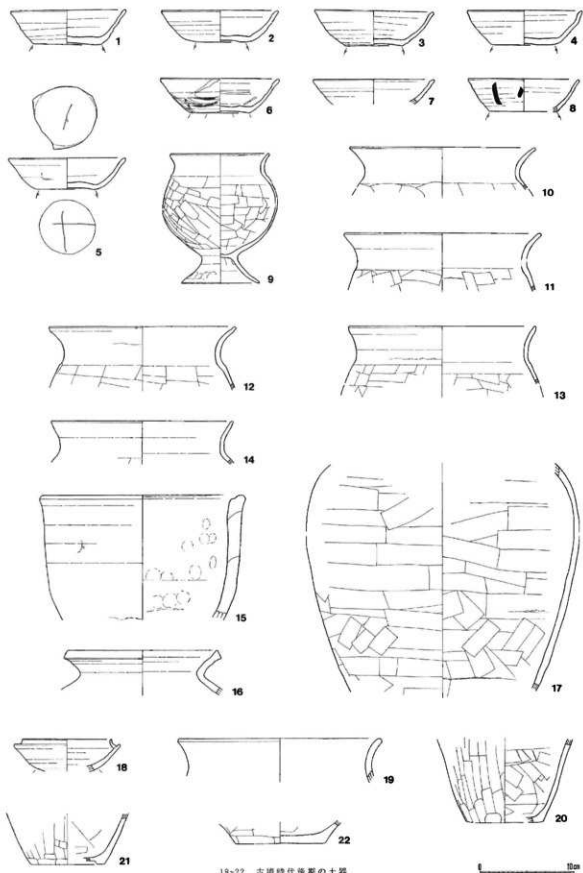
#### 石製品 (24・25)

24は砥石である。長さ6.8cm・幅4.6cm・最大厚2.6cm・重さ83g。63号住居跡出土のものと同形のものであるが、一回り小型である。使用面は3面確認できる。表面には細線が残る。よく使われているものと思われ、表面は凹面状に磨れている。北壁寄りの床面から5cm浮いた覆土中からの出土である。

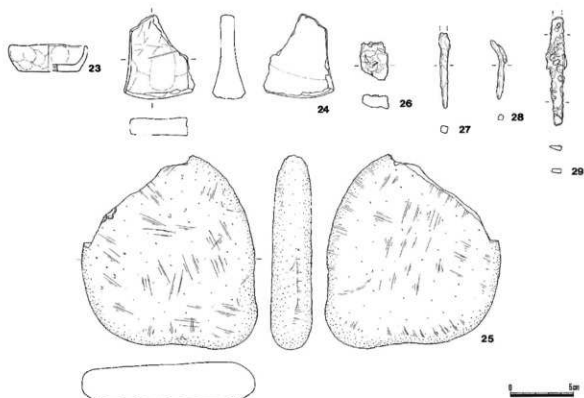
25は石皿である。長さ15.8cm・幅14.1cm・3.3cm。表裏ともに使用されており、表面には細かい擦痕が観察される。石質は花崗岩である。縄文時代の石器を転用した可能性もある。

#### 鉄製品 (26~29)

26は用途不明品である。長さ3.1cm・幅2.2cm・重さ8.8g。上端には細かい突起が並び、表面には繊維質の付着痕が認められる。全体を被覆していた可能性がある。覆土中からの出土である。図版4の2は



第13図 64号住居跡出土遺物1 (1/4)



第14図 64号住居跡出土遺物2 (1/3)

その表面のアップ写真である。

27は鉄鍔の頭部破片であろう。長さ6.2cm・幅0.9cm・重さ5.3g。断面は長方形を呈する。住居中央付近の床面上29cm浮いた覆土中からの出土である。

28は鉄釘の破片であろう。長さ4.8cm・幅0.7cm・重さ2.9g。断面は正方形を呈する。北壁寄りの床面上19cm浮いた覆土中からの出土である。

29は刀子である。切っ先部分は欠損している。長さ8.8cm・最大幅1.6cm・重さ12.4g。西壁溝の中央付近上層部からの出土である。

### (3) 遺構外出土遺物 (第15図)

遺構外の遺物として、縄文時代早・前・中期・弥生時代後期の土器、石製品が出土している。

#### 第1群 縄文時代早期中葉の沈線文系土器 (1)

太沈線によって斜位に施文される土器である。色調は暗茶褐色を呈し、胎土には砂粒を僅かに含む。内面は横位に磨きが施される。田戸下層式土器であろう。

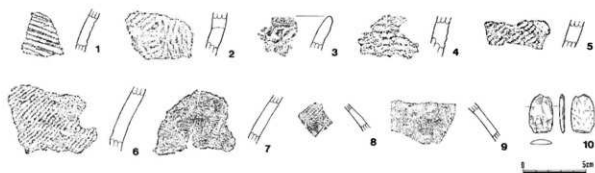
#### 第2群 縄文時代早期後葉の条痕文系土器 (2)

表裏条痕の土器である。色調は暗茶褐色を呈し、胎土には繊維・砂粒を含む。

#### 第3群 縄文時代前期中葉の羽状縄文系土器 (3~6)

すべて胎土には繊維を含み、外面には横位に粗い斜縄文が施される土器である。黒浜式土器であろう。

3は口縁部小破片で、外面はLの無節斜縄文が施文され、内面は横位の磨きが施される。4はLの無節斜縄文、5はL・Rの単節斜縄文が施文される。



第15図 遺構外出土遺物 (1/3)

6は胴部小破片で、外面にはLRの単節斜縄文が施される。また、輪痕が顕著に観察される。色調は黒褐色を呈し、胎土には砂粒・小石を主体に繊維を僅かに含む。内面は幅4mmのやや幅広の磨きが施される。

#### 第4群 弥生時代後期後葉の土器 (7~9)

7・8は壺形土器である。7は頸部破片で、内外面ハケ目調整後粗いヘラ磨きが施され、その後赤彩される。胎土の色調は暗黄褐色を呈し、胎土には砂粒を多く、茶褐色粒子を含む。

8は肩部小破片で、鋸歯状文の上に2条の結節文とLRの単節斜縄文が施文される。色調は暗灰褐色を呈し、胎土には白色・橙色粒子を含む。

9は台付甕の脚台部破片である。色調は暗橙色を呈し、胎土には橙色粒子を含む。内面は横位のハケナデ、外面は縦位のハケ目調整が施される。

#### 第5群 石製品 (10)

用途不明の石製品。石製模造品か。長さ3.1cm・幅1.9cm・厚さ0.4cm・重さ2.9g。節理で割れており、上部は折損している。表面はよく磨かれており、擦痕が認められる。石質は粘板岩。



## 第3章 西原大塚遺跡第54地点の調査

### 第1節 遺跡の概要

#### (1) 立地と環境

西原大塚遺跡は、志木市幸町3丁目を中心に広がる市内最大規模の遺跡で、東武東上線志木駅の1km程西方に位置している。遺跡は、北西方向に柳瀬川を臨む台地上に立地し、標高は遺跡南端で約19m、北端で約14mを測り、地形としては大きく南から北にかけて徐々に標高が低くなり、北側の低地（標高約8m）へと移行している。また、台地から低地の境である台地縁辺の地形は、遺跡の西側ではゆるやかな傾斜地になっているが、北側へ行くにつれ、際立った断崖地形に変化している様子が観察される。

遺跡の現況は、大部分が畑地であるが、平成5年以降、この地で西原特定土地区画整理事業が実施されており、今後、急速に住宅建設を始めとする各種開発の増大が予想される。

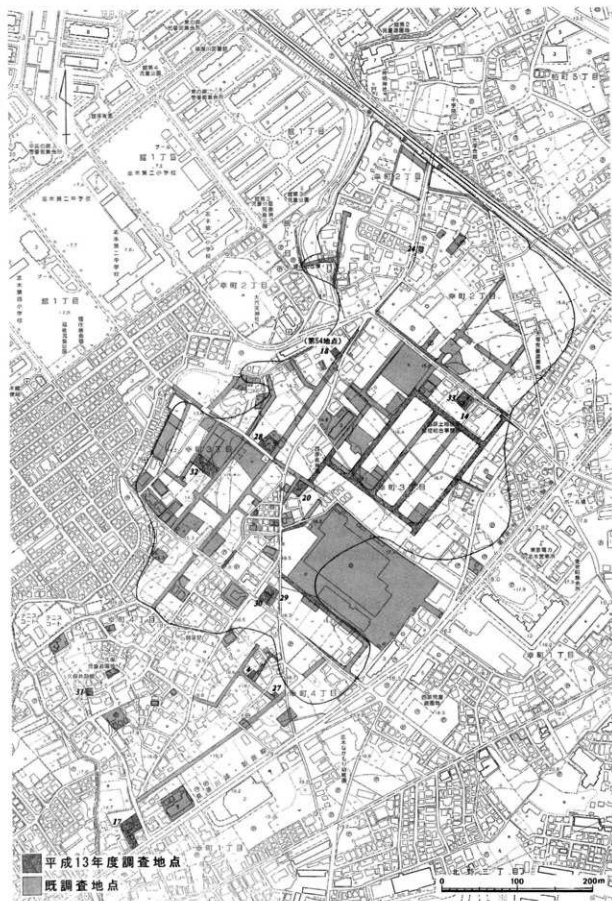
本遺跡は、昭和48年に第1回目の発掘調査が実施され、以後の調査から、旧石器・縄文時代前・中・後・晩期、弥生時代後期、古墳時代前・後期、奈良・平安時代、中・近世の複合遺跡であることが判明している。

#### (2) 発掘調査の経過

確認調査は、平成13年9月12日に実施した。調査区域に2本のトレンチを設定し、バックホーを使用し表土を剥ぎ、同時に遺構確認作業を行った。その結果、土坑数基と溝跡と考えられる遺構1基を確認した。そのため、ただちに依頼者に調査の結果を報告し、保存のための協議を行った。その結果、計画を変更することは不可能であるという回答を得たため、教育委員会は依頼者に発掘調査の実施を要請した。その後、依頼者から教育委員会に発掘調査の依頼があったため、教育委員会ではこれを受理し、発掘調査を実施することに決定した。

人員導入による発掘調査は、13日から開始した。まず、器材の搬入作業を行い、その後、調査区域内の整備と細部の遺構確認作業を行った。その結果、調査区域内には、縄文時代中期の土坑5・6基とそれらを切って構築された方形周溝墓1基（19号方形周溝墓）が分布していることが明らかになった。同日午前中には、19号方形周溝墓の精査を開始し、その日の内にほとんど掘りは終了し、セクションAの実測を終了する。19号方形周溝墓からの遺物は、ほとんど縄文土器であり、該期の良好な遺物は出土しなかった。縄文時代中期の土坑については、405～409号土坑（405～409D）とし精査を開始する。その後、405D・409Dについては、遺物を図面に入れ、随時取り上げる作業を開始した。また、409Dについては、3基程の土坑が重複している可能性があるものと考えられた。

14日、19号方形周溝墓の平板・セクションBの実測を終了する。408Dからは、加曽利EⅡ式のある程度器形が復元できる土器が出土している。409Dは、3基の土坑が重複していることが判明したため、409D・410D・411Dと遺構名を変更することにした。すべての遺構の実測を終了した後、全体写真を含め各遺構の写真撮影を行い、調査を完了した。



第16図 周辺地点と調査地点 (1/5000)

平成14年11月29日現在

## 第2節 検出された遺構と遺物

### (1) 縄文時代

縄文時代の遺構は、土坑7基が検出されている。これらは中期後葉から後期前葉に位置付けられる。

#### 405号土坑（第18図）

〔構造〕（平面形）楕円形。（規模） $2.16 \times 1.12\text{m}$ 。（長軸方位） $N-65^{\circ}-E$ 。（深さ） $40\text{cm}$ を測る。坑底はほぼ平坦で、壁は急斜に立ち上がる。（覆土）7層に分層される。

〔遺物〕覆土中より多数の上器片と黒曜石が出土した。

〔時期〕中期後葉。

#### 405号土坑出土遺物（第20図1～6、第23図1・2）

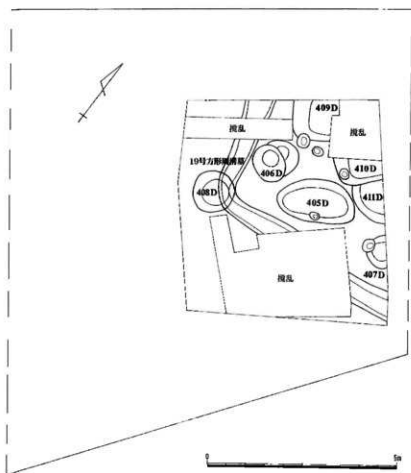
第21図1～6はすべて加曾利EⅡ式土器の胴部破片である。

1・2はRLの単節斜縄文を地文に沈線による懸垂文が施文される。

3～5は単節斜縄文による地文が施文される。5は所々に磨きが施されており、地文が消されている。

6は全面に縦位条線による地文が施文される。胎上には黄褐色粒子・砂粒を含む。

第23図1は石核、2は剥片である（第3表参照）。



第17図 遺構分布図 (1/100)

#### 406号土坑（第18図）

〔構造〕 2個の重複形態をとる。（平面形）不整形。（規模）1.26×1.06m。（長軸方位）N-30°-E。（深さ）西側が50cm、東側が35cmを測る。（覆土）西側が4層、東側が2層に分層される。

〔遺物〕 覆土中より土器片が出土した。

〔時期〕 中期中葉～後葉。

#### 406号土坑出土遺物（第20図7～10）

7・8は口縁部破片、9・10は胴部破片である。

7は横位にLの捺糸文を施し、その後2本単位による隆帯により渦巻文が施文される。胎土には砂粒・小石を多く含む。

8は口縁部は隆帯により肥厚させ、その直下には半截竹管による縦位の沈線文が施文される。胎土には砂粒・小石（最大5×8mm）を含む。

9は曲線的な隆帯に沿って半截竹管による沈線が描かれる。隆帯上には連続する刻みが付される。胎土には金雲母を多く、白色砂粒を含む。

10はRLの単節斜縄文を地文に曲線的な沈線による懸垂文が施文される。胎土には砂粒を含む。

以上、7・10は加曾利EⅠ式土器、8は五領ヶ台式土器か、9は阿玉台式土器であろう。

#### 407号土坑（第18図）

〔構造〕 東側が調査区域外のため詳細は不明である。（平面形）楕円形か。（規模）不明。（長軸方位）不明。（深さ）30cm前後を測る。（覆土）3層に分層される。

〔遺物〕 数点の土器片が出土した。

〔時期〕 中期中葉。

#### 407号土坑出土遺物（第20図11・12）

11は連続する刻みをもつ隆帯と沈線文が交互に施文され、一部連続する半截竹管による刺突文が充填される。胎土には茶褐色粒子・砂粒を含む。

12は幅広の連続爪形文が全面に施文される。胎土には砂粒・小石を多く含む。

いずれも勝坂式土器である。

#### 408号土坑（第18図）

〔構造〕 19号方形周溝墓に切られる。（平面形）隅丸方形。（規模）1.17×1.10m。（長軸方位）N-20°-W。（深さ）30cmを測る。断面形は緩やかな弧を描いている。（覆土）上層がローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む黒褐色土、下層がローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む暗茶褐色土を基調とする。

〔遺物〕 多数の土器片が出土し、加曾利EⅡ式の深鉢が1点復元できた。土鉢が1点出土している。

〔時期〕 中期中葉。

#### 408号土坑出土遺物（第20図13～25）

13～15は深鉢の口縁部破片で、13は条線を地文にクランク状の文様が施文される。胎土には砂粒・小石を多く含む。14は条線を地文に口縁部直下に2本の沈線がまわる。胎土には白色粒子・小石を多く含む。15は無文地に横位沈線文が施文される。色調は砂粒・小石（最大5mm）を多く含む。

16～24は深鉢の胴部破片である。16は縦位の沈線文を地文に横位沈線文が施文される。17は隆帯下に

縦文沈線が施文される。胎土には砂粒・小石を含む。18は竹管による円形刺突を隆帯上に付し、区画内にはR Lの単節斜縄文を地文に沈線文が施文される。胎土には黄褐色粒子を多く含む。19は大型破片で、棒状工具による沈線文を地文に2本単位の隆帯による渦巻文が施文される。胎土には白色粒子・茶褐色粒子・砂粒・小石を含む。20はR Lの単節斜縄文を地文に沈線による懸垂文が施文される。胎土には茶褐色粒子・砂粒を含む。21は条線による地文に磨消懸垂文が施文される。胎土には白色粒子を含む。22は斜位の沈線文を地文に懸垂文が施文される。胎土には黄褐色粒子・砂粒を含む。23は全面に縦文条線による地文が施文される。胎土には砂粒・小石を含む。

24は土器片錘である。重さ18.4g。無文土器。胎土には白色粒子・茶褐色粒子・砂粒を含む。

25は深鉢である。現器高17.4cm・推定口径34.3cm。口縁部文様帯は隆帯を貼付け、その後隆帯を幅広沈線でなぞることにより渦巻文と楕円文を施文している。胴部文様帯はR Lの単節斜縄文を地文に磨消懸垂が施文される。色調は暗黄褐色を基調とし、胎土には黄褐色粒子・砂粒・小石を含む。口縁部から胴部中位にかけて1/2程遺存する。

以上、14～16は連弧文系土器、19・22は曾利式土器、その他は加曾利EⅠ～Ⅱ式土器であろう。

#### 409号土坑（第19図）

〔構造〕北側は調査区域外であり、さらに東側が攪乱により壊されているため、詳細は不明である。（平面形）方形か。（規模）不明。（長軸方位）不明。（深さ）確認できた範囲では深さ30cm前後を測り、坑底は比較的平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。（覆土）3層に分層される。

〔遺物〕多数の土器片が出土している。

〔時期〕中期中葉。

#### 409号土坑出土遺物（第21図26～35、第23図3～5）

第21図26～29・32・35は深鉢の口縁部破片、30・33・34は胴部破片、31は底部破片である。

26は結節沈線による曲線文が施文される。胎土には砂粒を含む。27は口縁部は波状口縁を呈し、その口唇部外面には刻みを有する。文様は口縁部直下に半截竹管による連続する刺突文がまわり、その下方に曲線的な結節沈線文が施文される。胎土には金雲母・砂粒を多く含む。28・29は結節沈線により文様が施文される土器で、胎土には白色砂粒・金雲母を含む。32は内湾する無文の口縁部である。1ヶ所の補修孔が穿たれている。胎土には砂粒を含む。35は隆帯を貼り付けた後、幅広の半截竹管や棒状工具により多様な文様が描かれている。胎土には黄褐色粒子・砂粒・小石を含む。

30は曲線的に連続する幅広の結節文を細い結節沈線文が区画するように文様が施文される。胎土には砂粒を含む。33は刻みをもつ隆帯により楕円文を区画し、その内側には縦文の沈線文が充填される。胎土には砂粒・小石を含む。34は幅広の半截竹管により多様な文様が施文される。胎土には砂粒を含む。

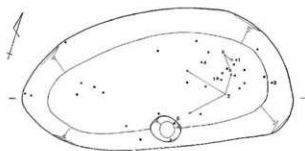
31は1本の隆帯が垂下する。胎土には金雲母を多く含む。

以上、おおよそ26～31は阿玉台式土器、32～35は勝坂式土器である。

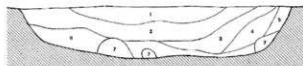
第23図3は削器、4・5は剥片である（第3表参照）。

#### 410号土坑（第19図）

〔構造〕411Dを切るが、東側は調査区域外であり、さらに北側が攪乱により壊されているため、詳細は不明である。（平面形）方形か。（規模）不明。（長軸方位）不明。（深さ）確認できた範囲では深さ30

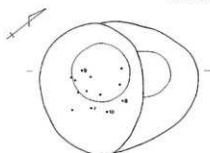


357

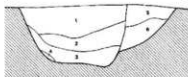


405号土坑

- 1層 ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む暗茶褐色土。
- 2層 ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物粒子を含む暗茶褐色土(1層より明色)。
- 3層 ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物粒子を含む暗茶褐色土(2層より明色)。
- 4層 ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物粒子を含む明茶褐色土。
- 5層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む明茶褐色土(4層より明色)。
- 6層 ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを多く含む暗茶褐色土。
- 7層 ロームブロック。

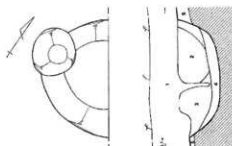


358



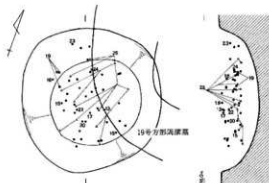
- 1層 ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む暗茶褐色土。
- 2層 ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗茶褐色土。
- 3層 ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗茶褐色土。
- 4層 ロームブロック。
- 5層 ローム粒子を含む暗茶褐色土。
- 6層 ローム粒子・ロームブロックを含む暗茶褐色土。

406号土坑



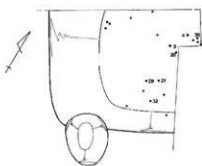
- 1層 表土及び腐植。
- 2層 ローム粒子を僅かに含む暗茶褐色土。
- 3層 ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物粒子を含む暗茶褐色土。
- 4層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗茶褐色土。
- 5層 ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む暗茶褐色土(炭化物付言輪)。

407号土坑



408号土坑

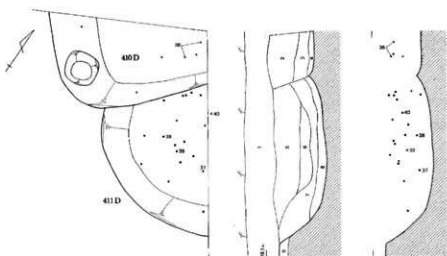




- 1層 表土及び腐乱。
- 2層 ローム粒子・ローム小ブロック・粘土粒子・炭化物粒子を含む暗茶褐色土。
- 3層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗茶褐色土。
- 4層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く、炭化物粒子を僅かに含む暗茶褐色土。



409号土坑



- 1層 表土及び腐乱。
- 2層 ローム粒子・粘土を含む暗茶褐色土。
- 3層 ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗茶褐色土。
- 4層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗茶褐色土。
- 5層 ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗茶褐色土。
- 6層 ローム粒子・炭化物粒子を含む暗茶褐色土。
- 7層 ローム粒子・ローム小ブロック・粘土粒子・炭化物粒子を含む暗茶褐色土。
- 8層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗茶褐色土。
- 9層 ローム粒子・粘土粒子・炭化物粒子を含む暗茶褐色土(遺物包含層)。

410・411号土坑

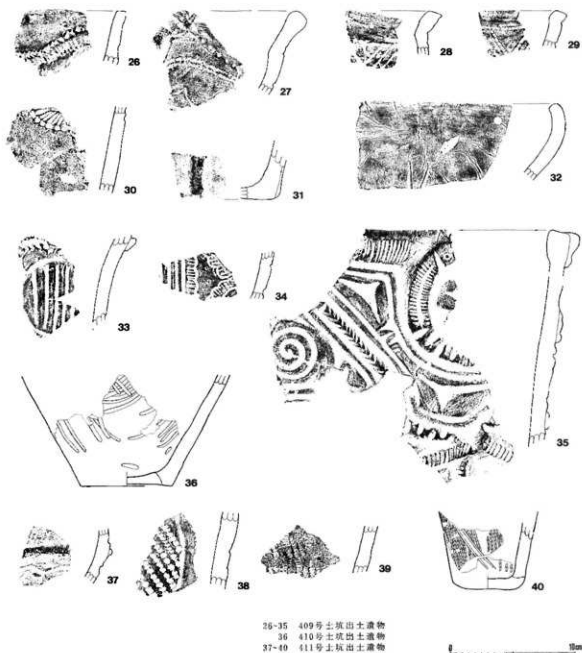


第19図 土坑2 (1/30)



第20图 土坑出土遗物1 (1/3)





26-35 409号土坑出土遺物  
 36 410号土坑出土遺物  
 37-40 411号土坑出土遺物

第21図 土坑出土遺物 2 (1/3)

cm前後を測り、坑底はほぼ平坦で壁は緩やかに立ち上がる。(覆土) 3層に分層される。

〔遺物〕 土器の小破片数点と底部が出土した。

〔時期〕 後期前葉。

**410号土坑出土遺物 (第21図36)**

深鉢の底部破片である。現器高 9.0cm・推定底径7.4cm。胴部下半には曲線的な沈線文が施文される。色調は内面黒色、外面暗茶褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。胴部下半から底部にかけてを1/4程度遺存する。堀之内1式土器であろうか。

#### 411号土坑（第19図）

〔構造〕 410Dに切られ、東側は調査区域外であるため、詳細は不明である。（平面形）円形か。（規模）不明。（長軸方位）不明。（深さ）確認できた範囲では深さ35cm前後を測り、断面は深い皿状を呈する。（覆土）3層に分層される。

〔遺物〕 20点程の土器片と、小型の深鉢の底部が出土した。

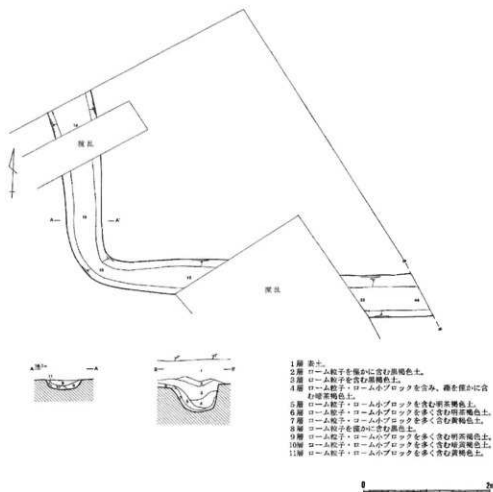
〔時期〕 中期中葉から後葉。

#### 411号土坑出土遺物（第21図37～40）

すべて深鉢で、37～39は胴部、40は底部破片である。

37は1本の隆帯を境に上方には斜位の結節沈線文、下方は波状沈線文が施文される。胎土には金雲母・砂粒を多く含む。38は平たい隆帯に区画された内側に斜位の連続する刺突文が充填する。胎土には白色砂粒を含む。39は地文としてLRの単節斜縄文が施文される。胎土には茶褐色粒子・白色砂粒を含む。40は現器高6.4cm・底径5.6cm。地文にはLの燃糸文を施し、斜位に半截竹管による沈線文が施文される。色調は内面黒色、外面暗茶褐色を呈し、胎土には砂粒・小石を多く含む。

以上、阿玉台式～加曾利E I式併行期の土器であろう。



第22図 19号方形周溝墓（1/60）

## (2) 弥生時代後期から古墳時代前期

弥生時代後期から古墳時代前期の所産のものと考えられる遺構は、19号方形周溝墓とした溝跡であった。検出された部分は、方形周溝墓の南西コーナーから南溝に相当するものと考えられる。この方形周溝墓については、出土遺物が僅少であったため、時期の細かな決定にはつながらなかった。

### 19号方形周溝墓(第22図)

〔構造〕(南溝) 確認できた範囲では長さ約5m、上幅45~70cm・下幅20~38cm・深さ15~44cmを測る。溝底は東側が深くなっており、壁は南壁がほぼ垂直に、北壁は少し緩やかに立ち上がっている。(西溝) 確認できた範囲では長さ2.8m・上幅50~75cm・下幅22~58cm・深さ14~18cmを測る。坑底はほぼ平坦で断面形は逆台形を呈する。

〔遺物〕 土器小破片が数点出土したのみである。

## (3) 遺構外出土遺物(第23図6~11)

遺構外から、旧石器・縄文時代の石器・剥片等が出土している。

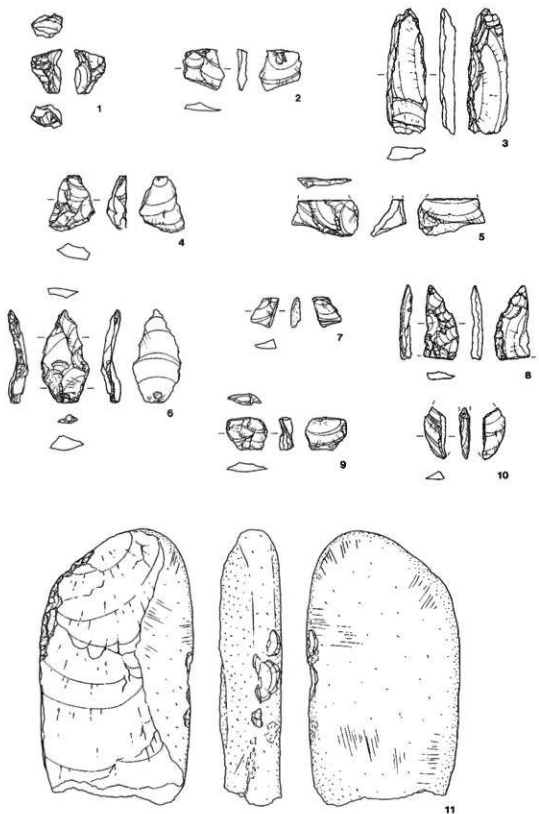
6はナイフ形石器、7は砕片、8は石鏃未製品、9・10は剥片、11は磨石である(第3表参照)。

(単位 cm・g)

図版番号	遺構名	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重量	所見
第23図1	405D	石核	黒曜石	1.72	1.38	0.98	1.6	ソフトハンマーによる直接打撃である。かなり頻繁に打面転移を行っている。
第23図2	405D	剥片	黒曜石	1.68	1.68	0.38	0.6	ハードハンマーによる直接打撃である。打面は残置しており、単刺離面打面である。
第23図3	409D	削器	緑色片岩	5.08	1.60	0.62	6.3	調整加工ではなく使用に伴うマイクロフレーキングである。
第23図4	409D	剥片	黒曜石	2.28	1.82	0.75	1.5	間接剥離である。打面は非常に薄く残置している。
第23図5	409D	剥片	黒曜石	(1.50)	2.68	1.41	2.8	上部を折損している。下面に原離面を残置している。
第23図6	遺構外	ナイフ形石器	黒曜石	3.78	1.92	0.78	3.2	刃潰し加工はハードハンマーによる押圧剥離、素材剥離はハードハンマーによる直接打撃である。打面は残置しており、複刺離面打面である。素材剥片は縦長である。
第23図7	遺構外	砕片	黒曜石	(1.20)	(1.12)	0.38	0.3	上下を折損している。左右側面は原離面である。
第23図8	遺構外	石鏃未製品	玉髄	(3.00)	(1.40)	0.47	1.6	刃部加工は押圧剥離であり、素材剥片は横長である。
第23図9	遺構外	剥片	黒曜石	1.32	1.63	0.55	1.0	ハードハンマーによる直接打撃である。打面は残置しており、複刺離面打面である。
第23図10	遺構外	剥片	黒曜石	(2.08)	(0.90)	0.42	0.5	上部と右側縁を折損している。
第23図11	遺構外	磨石	砂岩	11.20	6.18	2.52	232.4	擦痕が表裏に、右側縁にはこう打痕が認められる。

( )内は現存値

第3表 石器観察表



1-2 495号土坑出土遺物  
 3-5 409号土坑出土遺物  
 6-11 遺構外出土遺物



第23図 土坑・遺構外出土石器 (2/3)

## 第4章 まとめ

本書は、平成13年度に国庫補助事業として、確認調査及び発掘調査等を実施した計33地点の調査成果を収録したものである。そのうち発掘調査を実施したのは、田子山遺跡第78地点と西原大塚遺跡第54地点の2地点であった。

以下、これら2地点の調査所見をまとめることにする。

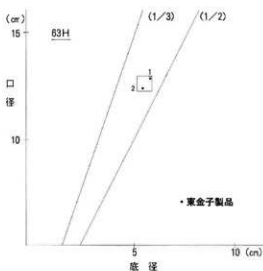
### 1. 田子山遺跡78地点

本地点からは、縄文時代の集石1基、平安時代の住居跡2軒が検出されている。ここでは、平安時代の63号・64号住居跡に絞って若干の考察を試みたい。

#### (1) 平安時代63号住居跡について

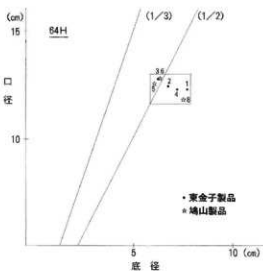
63号住居跡は、調査区北西隅からの検出であり、西側は調査区域外にあるものと思われる。基本構造として、長軸は不明であるが、短軸は3.66mの長方形を呈している。確認面であるローム面から床面までの深さは、31～43cmを測り、壁溝は南・北壁に巡らされている。

カマドは東壁のやや北東コーナー寄りに設置されており、部分的に後世のピットにより破壊されている。主軸方位はE-W、長さ是不明であるが、幅87cmを測る。安定した粘土層の確認ができなかったため、構造を復元するには至らなかった。また、燃焼部上には土製支脚が1点設置されていた。この支脚



(cm)			
No.	口径	底径	器高
1	12.8	5.6	3.3
2	(12.4)	5.3	3.7

( )は推定



(cm)			
No.	口径	底径	器高
1	12.8	7.5	3.8
2	12.5	6.5	3.4
3	12.8	6.2	3.9
4	12.3	7.0	3.7
5	(12.6)	6.0	3.4
6	(12.8)	6.3	3.4
8	(11.9)	(7.2)	3.5

( )は推定

第24図 環形土器の口径-底径比

については遺存状態が悪く、取り上げることはできたが、実測はできなかった。

出土遺物(第8図)については、6の武蔵型甕がカマドに設置された土器と考えられる他、1・2・4が床面上に出土する以外は、すべて覆土中からの出土であると言える。特に、5は覆土中から幅広い範囲で散在的に出土することから、これらの遺物は廃棄されたものと考えられる。

土器に関しては、須恵器環形土器4点、須恵器甕形土器1点、土師器甕形土器2点が出土している。

まず、須恵器環形土器(第8図1~4)については、すべて東金子製品と考えられる。胎土には長石など白色砂粒を多く含む特徴を有し、白色針状物質を含まない。また、1・2の底部には回転系切り痕が見られること、さらに第24図に示した口径-底径比が1/2を下回ることから、およそ9世紀後葉の範疇で捉えて大差ないものと思われる。鳩山編年ではH B VII期に該当する(渡辺1990)。

土師器甕形土器(第8図5・6)については、武蔵型甕と呼ばれる口縁部破片である。口縁部形態は定型化した「コ」の字口縁を呈している。この特徴は、根本編年(根本1999)によるVII期(9世紀後半)の「口縁部がコの字になるもののみが見られる」段階に比定される。

須恵器甕形土器については、色調が濃灰褐色を呈し、胎土には白色砂粒を多く含むことから、東金子製品と考えられる。全体にていねいなナデ調整が施されているため、叩目痕はうっすらと確認できる程度である。外面立ち上がり部分はその後へラ削りが施される。単体での時期の特定には至らなかった。

以上、63号住居跡の出土土器についてまとめると、須恵器環形土器・土師器甕形土器は、9世紀後半に位置付けられる。

## (2) 平安時代64号住居跡について

64号住居跡は、調査区東端からの検出であり、住居南東コーナーは調査区域外にあるものと思われる。本住居跡はカマドが北壁(B号住居跡)と東壁(A号住居跡)の2ヶ所で確認され、さらに貼床除去後にカマドと壁溝をもつ小竪穴(C号住居跡)が検出されたことから、拡張後に一度カマドの移設を伴う建て替えが行われた住居跡と理解することができる。住居跡の新旧関係は、古い順からC→B→A号住居跡である。なお、最新のA号住居跡は、覆土中から多くの炭化材を出土していることから、最終的に火災に遭遇し、廃絶したものと考えられる。

A・B号住居跡の基本構造についてであるが、まず、規模は東西方向に5.90m、南北方向に3.95mの南北方向に対し横長の長方形を呈する。北壁に設置されたカマドBは旧カマドと考えられ、壁への掘り込みが確認できるのみであった。東壁に設置されたカマドAは新カマドであろう。東側の先端部は調査区域外に延びており、さらに後世のピットで破壊されているため、遺存状態が悪かった。壁溝はカマドAが設置される東壁には確認できなかった。また、床面を精査中に段差にして1~2cm程の硬化面が2枚確認できたことから、B号住居跡からA号住居跡に建て替えに際し、新たに貼床が施されていたことが判明した。南壁寄りからは入口梯子穴と思われる小ピットが1本検出された。

C号住居跡については、A・B号住居跡の貼床精査中に検出された小竪穴状遺構である。ほとんどが痕跡でしかなく、カマドと壁溝がろうじて確認できたに過ぎない。規模は3.67×2.86mで、A・B住居跡と同軸の長方形を呈する。

次に出土遺物についてであるが、多くの遺物が幾分東半分に着重するが、覆土全体から散在的に出土している。遺物には須恵器環・甕形土器、土師器甕形土器、ミニチュア、石製品(砥石・石皿)、鉄製品(刀子・釘)がある。なお、第13図18~22については古墳時代後期(7世紀後葉)に比定される土器である。混入品と考えられる。

ここでは、特に出土土器について考えることにする。土器は須恵器・土師器に分類でき、さらに須恵器は坏・甕形土器、土師器は甕形土器で構成される。

まず、須恵器坏形土器（第13図1～8）であるが、5・6・8の胎土中に白色針状物質が含まれていることから、鳩山製品であると特定できる。その他の1～4・7は胎土に長石など白色砂粒を多く含む特徴を有し、白色針状物質を含まないことから、東金子製品と考えられる。底部調整は6のみが周辺調整を施される他はすべて未調整で、回転系切り痕が残る。分量はすべて口径12cm台であるが、口径-底径比は、3・5・6が僅かに1/2を下回り、その他は1/2を上回るということを考え合わせると、やや年代差があるものと考えられる。時期は、おおよそ9世紀前葉から中葉の範疇として把握できる。鳩山編年ではHB VI～VII期に該当する（渡辺1990）。この年代差については、C号住居跡が構築されて以来A号住居跡が廃絶するまでの存続幅として表れているものと考えられる。

土師器甕形土器（第13図9～15）については、9～14は武蔵型甕と呼ばれるもので、さらに小型甕（9）、大型甕（10～14）に分類できる。特に大型甕の口縁部形態については、すべて弓状に外反する口縁部を基本とするが、よく観察すると12・14は口縁部途中に輪積み痕による屈曲部、13は口縁部横ナデによる段差が確認でき、明瞭ではないが「コ」の字口縁の萌芽的な要素を指摘することができる。11についてはより「コ」の字口縁に近づいている形態であると言える。

なお、イメージ的にはヘラ削り調整により極限的に薄く作られたものが武蔵型甕であるという認識で筆者は捉えているが、中でもその典型なのが、暗赤褐色の色調を呈するものと理解している。しかし、12・13のように橙色を基調とする淡い褐色を呈しているものも散見できる。これに類似する例は、今までにも志木市では田子山遺跡第5地点12号住居跡（佐々木1992）・城山遺跡第1地点43号住居跡（佐々木・尾形1988）などで確認されている。城山遺跡第1地点43号住居跡の例は、さらに黄色味が強く、今後、意識すればさらに色調の違ったものも確認でき、さらに胎土分析を併用することにより、違ったデータを得られるのではないかと推測される。つまり、今まで一色単に武蔵型甕と呼称してきた土器が将来的に型式分類が可能になり、その広がり方の違いが分布範囲の違いとして明示できるようになるのではないかと考えたい。武蔵型甕の流通について、一度一元的な生産ではないという懷疑心ももち、根本的に基礎的分析を見直す必要もあるのではないかと痛感する。

武蔵型甕の時期については、根本編年（根本1999）によるVI期（9世紀中葉）ではすでに「コ」の字形が主体を占めていることから、その直前のV期（9世紀前半）に比定されるものと考えられる。

なお、15は厚手で口縁部内面に弱い沈線がまわる土器であるが、内面には指頭押捺痕を残し、さらに内外面にはロクロ成形痕と思われる回転ナデの痕跡が観察される。この土器については、今回土師器甕形土器として取り扱ったが、中世の在地系甕を思わせるものである。混入品とも考えたが、出土位置が床面に近く安定した状態であることから、共存するものと理解することにした。時期の詳細については不明である。

以上簡単であるが、本住居跡出土土器は、須恵器坏形土器が9世紀前葉から中葉に比定され、土師器甕形土器が9世紀前葉に比定できるものと考えられる。そして、須恵器坏形土器に表れている年代差は本住居跡が「拡張・建て替え」という経過を経て最終的に廃絶したという事実を如実に物語るものと考えられる。

## 2. 西原大塚遺跡第54地点

本地点からは狭小な面積でありながら、縄文時代中期～後期にかけての土坑7基、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての方形周溝墓1基が密集して検出された。

まず、縄文時代の土坑についてであるが、405～411号土坑のすべての土坑から土器が出上していることより時期を比定することが可能である。特に408号土坑は、出土土器が多く、実測可能にまで復元できる土器が出上している。以下、各土坑の時期をまとめてみることにする。

407・409号土坑－中期中葉（阿玉台・勝板式期）

406・411号土坑－中期中葉～後葉（阿玉台・加曾利EⅠ式期）

405・408号土坑－中期後葉（加曾利EⅡ式期）

410号土坑－後期前葉（堀之内Ⅰ式期）

次に弥生時代後期～古墳時代前期にかけての方形周溝墓についてであるが、出土遺物に乏しく時期の特定につながる遺物は検出されなかった。この遺構については、未報告ではあるが、この調査区のすぐ南側の隣接する区域で、平成14年度に西原地区特定区画整理事業による発掘調査によって検出された方形周溝墓と一致することが判明している。詳細解明については今後の課題である。

## 【引用・参考文献】

- 佐々木保俊 1992「第5章 田子山遺跡第5地点の調査」『中道遺跡第12地点 中道遺跡第13地点 田子山遺跡第4地点 田子山遺跡第5地点発掘調査報告書』志木市の文化財第18集 埼玉県志木市遺跡調査会
- 佐々木保俊・尾形剛敏 1988『城山遺跡発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第4集 埼玉県志木市遺跡調査会
- 根本 靖 1999「所沢市東の上遺跡の基礎研究 Ⅱ－土師器煮滲具の変遷について－」『あらかわ』第2号 あらかわ考古談話会
- 2001「東の上遺跡の基礎研究 Ⅳ－7世紀後半から8世紀の環形土器の変遷－」『あらかわ』第4号 あらかわ考古談話会
- 渡辺 一 1988『鳩山窯跡群Ⅰ』鳩山窯跡群遺跡調査会 鳩山町教育委員会
- 1990『鳩山窯跡群Ⅱ』鳩山窯跡群遺跡調査会 鳩山町教育委員会
- 1991『鳩山窯跡群Ⅲ』鳩山窯跡群遺跡調査会 鳩山町教育委員会
- 1992『鳩山窯跡群Ⅳ』鳩山窯跡群遺跡調査会 鳩山町教育委員会



图 版

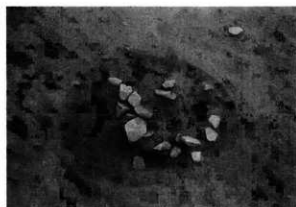




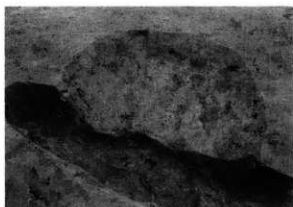
1. 調査区近景



2. 確認調査風景



3. 5号集石



4. 5号集石



5. 63号住居跡遺物出土状態



6. 63号住居跡遺物出土状態



7. 63号住居跡



8. 63号住居跡カマド



1. 発掘風景



2. 64号住居跡遺物出土状態



3. 64号住居跡遺物出土状態



4. 64号住居跡遺物出土状態



5. 64号住居跡遺物出土状態



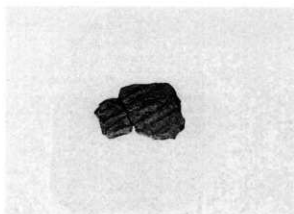
6. 64号住居跡遺物出土状態



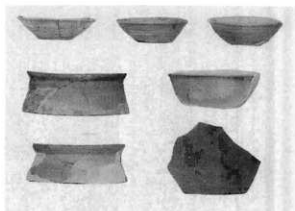
7. 64号住居跡遺物出土状態



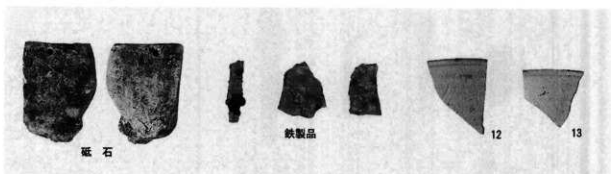
8. 64号住居跡



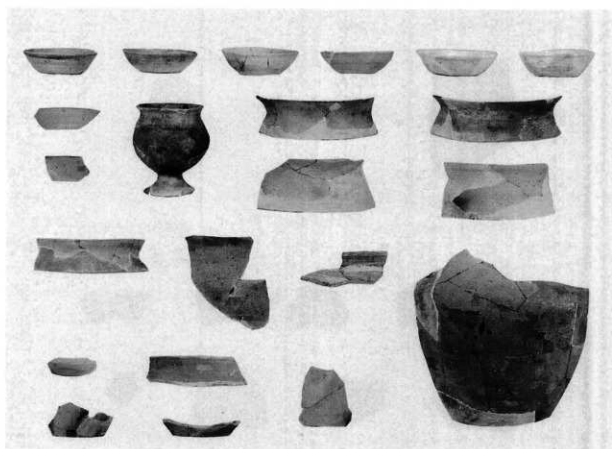
1. 5号集石出土遺物



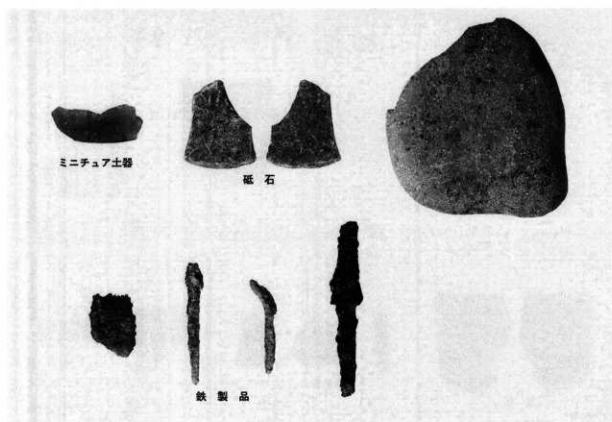
2. 63号住居跡出土遺物



3. 63号住居跡出土遺物



4. 64号住居跡出土遺物



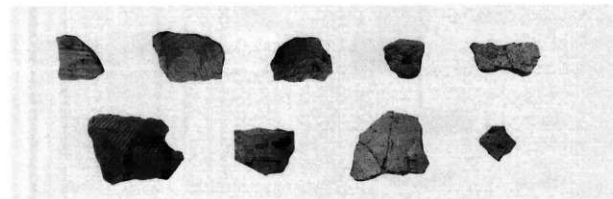
1. 64号住居跡出土遺物



2. 64号住居跡出土鉄製品(26)



3. 遺構外出土石製品



4. 遺構外出土遺物



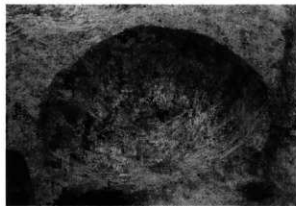
1. 調査区近景



2. 発掘風景



3. 405号土坑



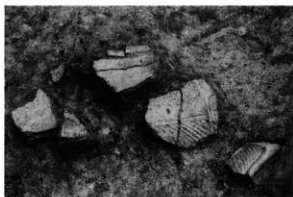
4. 406号土坑



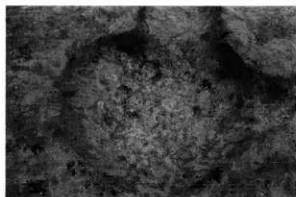
5. 407号土坑



6. 408号土坑遺物出土状態



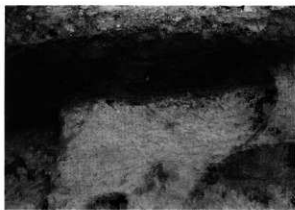
7. 408号土坑遺物出土状態



8. 408号土坑



1. 409号土坑



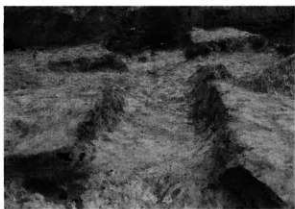
2. 410・411号土坑



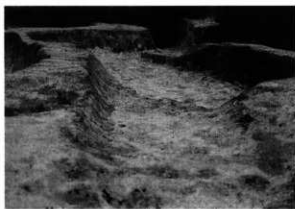
3. 19号方形周溝墓土層断面



4. 19号方形周溝墓土層断面



5. 19号方形周溝墓西溝



6. 19号方形周溝南溝

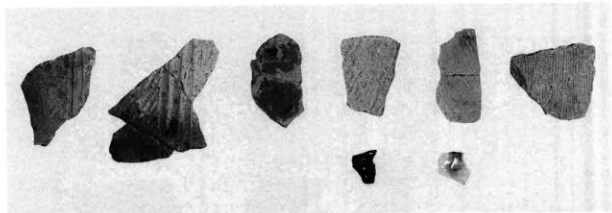


7. 発掘風景

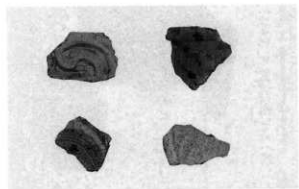


8. 調査区全景

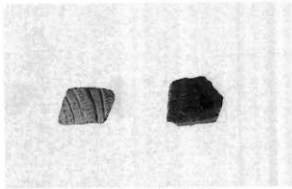




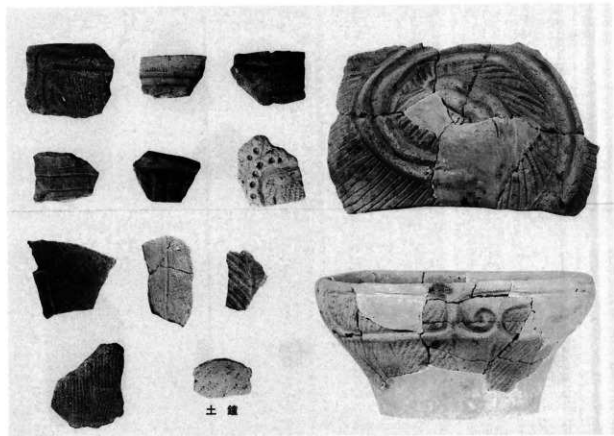
1. 405号土坑出土遺物



2. 406号土坑出土遺物

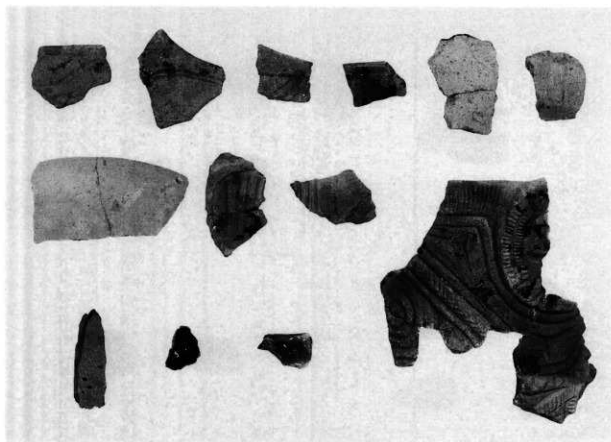


3. 407号土坑出土遺物



土 罐

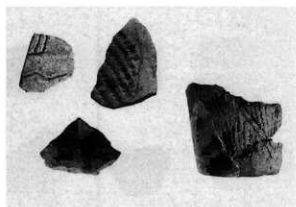
4. 408号土坑出土遺物



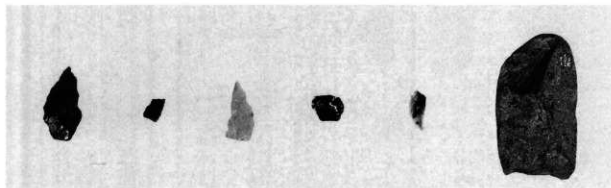
1. 409号上坑出土遺物



2. 410号土坑出土遺物



3. 411号土坑出土遺物



4. 道構外出土遺物

# 報告書抄録

ふりがな	し き し い せき ぐん							
書 名	志 木 市 遺 跡 群 13							
副 書 名						巻 次		
シリーズ名	志木市の文化財					巻 次	第35集	
編 著 者	尾形則敏 深井恵子							
編 集 機 関	埼玉県志木市教育委員会							
所 在 地	〒353-0002 埼玉県志木市中宗岡1丁目1番1号 TEL 048 (473) 1111							
発行年月日	平成15年(2003)年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド		北 緯 (°'")	東 経 (°'")	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市 町 村	遺跡番号					
田子山遺跡 (第78地点)	志木市本町 3丁目1826-1	11228	010	35° 49' 38"	139° 35' 10"	20020613 ～ 20020710	173.10	個人専用住宅
西原大塚遺跡 (第54地点)	志木市幸町 3丁目3154の一部	11228	007	35° 49' 16"	139° 34' 00"	20020913 ～ 20020914	90.74	物置建設
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特 記 事 項			
田子山遺跡 (第78地点)	集 落	縄文時代前期 平安時代	集石 1基 住居跡 2軒	土師器・須恵器				
西原大塚遺跡 (第54地点)	集 落	縄文時代中期～ 後期 弥生時代後期～ 古墳時代前期	土坑 7基 方形周溝墓 1基	土器・石器				

志木市の文化財 第35集

## 志木市遺跡群 13

発 行 埼玉県志木市教育委員会  
埼玉県志木市中宗岡1丁目1番1号  
発 行 日 平成15(2003)年3月31日  
印 刷 株式会社 白 蜂 社